

令和6年度

研究紀要

第3集

子どもたちの教科指導における資質・能力の育成に
つながるアセスメントの探究

アセスメント情報の収集・分析による教科指導上の手立てや配慮の整理・充実（1年次）

アセスメントに基づいた授業改善、評価（2年次）



令和7年3月

北海道手稲養護学校三角山分校

目次

挨拶

第1章 研究の概要

1	研究主題	1
2	今回の研究に至る背景	1
3	研究の目指すところ	2
4	研究内容と方法	3
5	評価	3
6	校内研究推進日程	4

第2章 アセスメント情報の収集・分析による教科指導上の手立てや配慮の整理・充実（令和5年度研究）

1	実践研究準備	5
2	グループ協議による実践計画の作成・検討	7
3	中間報告会	7
4	指導実践検討	8
5	グループ研究まとめの確認	8
6	全体交流会	8
7	1年目 研究の評価と改善に向けて	9

第3章 アセスメントに基づいた授業改善、評価（令和6年度研究）

1	実践研究準備	11
2	グループ協議による実践計画の作成・昨年度までの振り返り	12
3	「アセスメントに基づいた授業改善・評価について」校内研修	12
4	中間交流会	17
5	児童生徒の変化についての検証と実践の評価、改善のまとめ	18
6	全体交流会（研究紀要と研究成果の交流）	18
7	成果と課題（研究の評価と改善に向けて）	18

資料	グループまとめ	23
	（訪問教育 B 訪問教育 A 高等部 A 高等部 B 小中学部）	

第4章 研究の考察とまとめ

1	研究の成果	68
2	仮説の検証	68
3	今後の課題と展望	68

あとがき

研究同人

研究紀要発刊にあたって

校長 星野健史

令和6年12月25日に文部科学大臣が次期学習指導要領の改訂を中央教育審議会に諮問しました。別添資料「初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について」には、諮問の理由として、社会や経済の先行きに対する不確実性がこれまでになく高まり、激しい変化が止まることのない時代となったこと。「人生100年時代」の到来、マルチステージの人生モデルへの転換、生涯にわたって主体的に学び続け、自らの人生を舵取りする力を身に付けることなどの重要性。また、芸術やスポーツを通じた豊かな心身の育成を含め、多様な個人が幸せや生きがいを感じると同時に、地域や社会全体でも幸せや豊かさを享受できるよう、教育を通じて、調和と協調を重視する日本社会に根差したウェルビーイングの向上を図ることが必要であることが理由として示されています。現行の学習指導要領では、「社会に開かれた教育課程」を理念に掲げ、全ての教科等を「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」という三つの資質・能力の柱で整理され、資質・能力を身につけるためには「何を学ぶか」だけでなく、「何ができるようになるか」を明確化するとともに、「どのように学ぶか」が重要です。本研究では「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実を図り、「主体的・対話的で深い学び」につながるよう、児童生徒一人一人の発達や障がいの状況についてのアセスメント力向上を研究テーマとし専門性を磨き合い日々の授業改善に取り組みました。「できる」「できない」の二元論ではなく「どのように何につまずいているのか」を把握し、「指導の個別化」や「学習の個性化」を工夫することが大切です。三角山分校は前身の八雲養護学校の時代からICTを活用した「指導の個別化」を医療機関と連携して研究開発を重ねています。卒業後もなくてはならない支援ツールとして病状に合わせ改良しながら使われ続けています。もう一つ本分校は、札幌市内の病院に入院する児童生徒への訪問教育の拠点校としての役割を担っています。短期間ですが入院中も学びを続けられるよう前籍校との連携、高校受験のための相談支援、病院と協働による学習環境の整備を行っています。辛い治療にも耐えながらポジティブに自分の将来を考えられるよう精神的幸福感や自己肯定感を高める取組を大切にしています。今年度は、アバターロボットによる遠隔授業やメタバース空間によるICTを活用した「協働的な学び」を広げ、児童生徒一人一人の個性を生かし、主体的に学んだ力を発揮して成長を実感できる学習の実現を果たすことができました。

最後に、本研究の推進にあたり、ご指導とご協力をいただいた北海道立特別支援教育センター肢体不自由病弱教育室の皆様、北海道医療センターの皆様、社会体験の場を提供いただいた地域の関係機関の皆様、ICT機器の支援をいただいた企業の皆様に深く感謝申し上げます。研究紀要発刊にあたっての挨拶といたします。

令和7年3月

第1章

研究の概要

第1章 研究概要

1 研究主題（2か年計画）

「子どもたちの教科指導における資質・能力の育成につながるアセスメントの探究」

1年次：アセスメント情報の収集・分析による教科指導上の手立てや配慮の整理・充実

2年次：アセスメントに基づいた授業改善、評価

2 今回の研究に至る背景

(1) 本分校について

北海道手稲養護学校三角山分校（以下：本分校）は、北海道八雲養護学校を前身とする学校である。令和2年8月、併設する国立病院機構北海道八雲病院の機能移転にともなって札幌に移転し、「北海道手稲養護学校三角山分校」としてスタートした。校舎は北海道医療センターに隣接しており、特別教室などの学校施設・設備を市立札幌山の手支援学校と共有している。

主に筋ジストロフィーもしくは重度重複障害をもつ児童生徒が在籍する。また、令和5年度から札幌市の病院訪問教育の拠点校として、札幌市内の病院に入院している小学部から中学部までの慢性疾患や進行性疾患の児童生徒への授業を行っている。北海道内2校のみとなる病弱特別支援学校であり、病弱教育のセンター的機能を有し、札幌の地から道内病弱教育の発展に向けた情報の共有・発信等、これまでに培ってきた病弱教育の専門性の維持・向上を図っていく必要がある。

(2) これまでの研究

これまでの研究は、学校が目指す力（「志」と三角山の「社会人基礎力」）の明確化、そして新学習指導要領とそれまでの研究を踏まえた「できる」を目指した授業実践を行ってきた（H30・R1）。ここで明確となった「学校が目指す力（児童生徒が目指す力）」は、学校経営計画、校内掲示、個別の指導計画、キャリア教育計画に反映されている。さらに、それらの力をどのように日々の授業の中で育むかを検討するため、「学校が目指す力（児童生徒が目指す力）」の育成を目指した授業実践についての研究を行っている（R2）。

令和3、4年の校内研究では、自立活動の指導における具体的な目標設定についての研究が進められた。自立活動にかかわる専門性の維持・継承、実態把握から指導目標・内容設定に至るプロセスや考え方を反映できるよう、学習指導要領の流れ図を元に一部修正し、本分校教員と確認し、自立活動実態把握票を作成した。自立活動実態把握票では、6区分27項目を活用して実態把握を記入し、そこから指導目標・内容の設定に至るプロセスを課題関連図で可視化し、中心課題を導き出すことができた。また、活動分析表を活用した実践では、教員間で情報共有、共通の指標、指導の方向性の統一感を生み、成果や成長の課程をわかりやすくすることができた。

年度当初、各担任や教科担当が入学生や、転入生については、個別の教育支援計画や個別の指導計画を新規作成する。また、前年度からの在校児童生徒については、年度末に加除修正されたものを引き継ぎ、新担当者が内容を確認し、加筆している。評価は、担任を中心とした各教科担当が個別の指導計画に記録するなどして、授業改善に生かされている。

(3) 児童生徒の実態

児童生徒の大半は体調や身体の状態等の理由から入院を選択し、本分校に転入または、高等部1年から入学してくる場合が多い。家族と離れての入院生活に抵抗感や不安を感じる児童生徒が多く、一人ひとりの心に寄り添った指導や、主体的に「できること」を増やし、自己肯定感を高める指導が必要である。

学習面では、心肺の状況や筋力の低下、座学では身体への負担、筆記への困難さや発達障害の特性からくる理解するための配慮等が必要であり、学習生活や学習環境において周囲との差を感じ、自尊感情や自己肯定感が低下しやすい傾向にある。しかし、ICT機器を活用することで、児童生徒が主体的に学ぶためにより有効な手立てとなっており、一人ひとりの実態に合わせた学習内容や環境の整備を行い、体力面への負担軽減などを図っている。

生活面では、ドアの開閉や道具の移動など様々な介助を必要とするため、行って欲しいことを

第1章 研究概要

他者へ依頼することができるよう、指導を行っている。また、卒業後の社会参加に必要な力を育むために、地域とのかかわりからどのように生活し、どのような活動を行っていくのか等、コミュニケーション力につながる表現力と社会性の向上を目指している。外出することが難しい児童生徒たちにはビデオ会議を活用した遠隔実習を積極的に行うなどして社会とつなげていくための就労体験に取り組んでいる。また、隣接している病院の主治医と学習内容や方法を確認した上で、限られた時間での校外学習や外部との交流学习を進めている。

3 研究の目指すところ

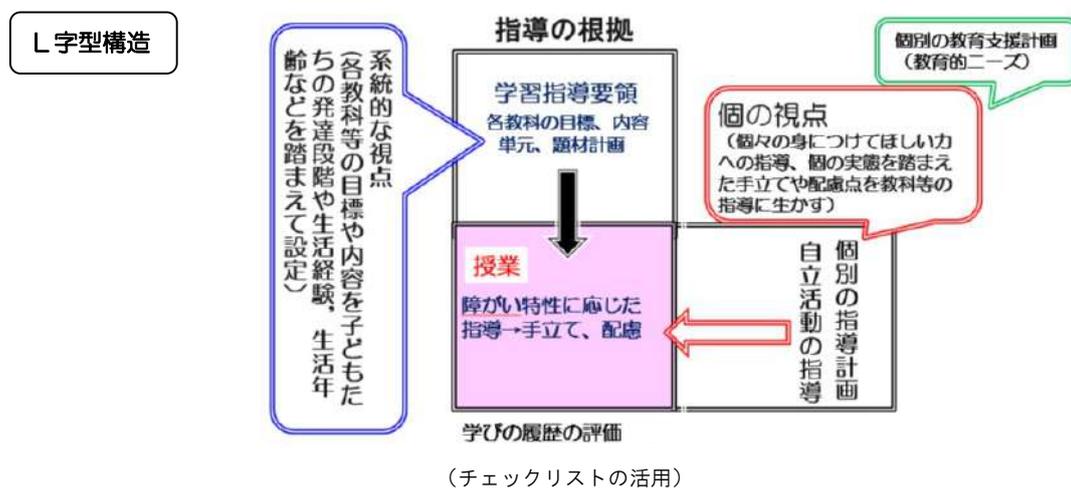
(1) 研究主題の理由

本分校では、令和3年度から4年度までの2年間、自立活動の具体的な目標設定の手続きを踏まえた研究と実践を行ってきた。課題関連図による実態の見える化、活動分析による指導の見える化に取り組み、子どもの全体像を明らかにしていくために課題相互の関連や中心課題の背景要因を教職員が協働しながら考えてきた。L字型構造（※下図参照）で言えば、個の視点から生活全般に関わる課題に迫る取り組みを実践してきた。令和5年度は教科指導にフォーカスして系統的な視点も踏まえながら教科学習上の手立てや配慮の整理・充実を図っていきたいと考えた。

本分校では令和5年度から教科指導を中心とした市内の病院に入院している児童生徒の訪問教育が始まった。今後、より一層の各教科の指導力やオンライン及びオンデマンドによる授業の充実が重要になってくる。加えて、教育課程検討委員会で「在校生徒の障がい特性に応じた教科指導の質を担保していく必要がある」ということが課題となった。また、教職員の次年度の研究にかかわるアンケートからは、「一人一人の生徒の状況について分析、共有した指導を行ったことがとても有意義であった」という感想が多く上げられた。

令和5年度6年度の取り組みとしては、更なる児童生徒理解に迫る実践研究を継続していくとともに、L字型構造の2つの視点から子どもたちの見方・とらえ方を共通確認し、子どもたちの障がい特性に応じた指導（手立て、配慮の充実）につなげていきたい。

そのため、令和5年度より2か年の実践研究主題を「子どもたちの教科指導における資質・能力の育成につながるアセスメントの探究」として設定し、グループに分かれて取り組むことで、児童生徒の状況に応じた教科指導力の向上を目指していくことができるのではないかと考えた。



(2) 研究の目的

日々の実践での課題を取り上げ、L字型構造の個の視点と系統的な視点を踏まえたアセスメントの在り方や指導について検証することで、子どもたちの見方、とらえ方の向上を目指していく。また、アセスメントに基づき、授業改善に向けた取組を行い、子どもたちの将来につながる資質・能力の育成を図る。

第1章 研究概要

(3) 研究仮説

- ・実践研究の場の一層の充実により、複数の教師の目による客観性を担保した教育活動が展開できるのではないか。
- ・フォーマル又はインフォーマルなアセスメントを実施、分析、検証することで、教師一人ひとりの子どもたちへの見方、とらえ方の視点が広がり、個別の指導計画及び教科指導の充実につながっていくのではないか。

4 研究の内容と方法

(1) アセスメントに基づく具体的取り組み（例）

STEP 1

- ・普段の授業実践において気になったり、課題と感じる子どもたちの様子や授業実践を各グループ内で持ち寄り、対象生徒を決定する。
- ・個別の指導計画や自立活動実態把握票など、これまでの児童生徒の情報と新しく得られた情報を分析・検証することで「児童生徒の見方、とらえ方」「教師のかかわり方」を考える。

⇓ (学習状況の確認、対象児童生徒の選出、課題の抽出)

STEP 2

- ・グループ内で児童生徒理解を深めていきたい事項の確認、アセスメントの方法の確認、文献研究、外部専門家等の活用

(理論研究)

STEP 3

- ・資料の蓄積、情報の分析と整理を行う。課題の分析。学習活動の工夫、手立ての工夫、教材・教具の工夫

(アセスメントの実施、仮説に基づく指導の検討)

STEP 4

- ・授業の実施

(教科指導上の手立てや配慮の整理・充実)

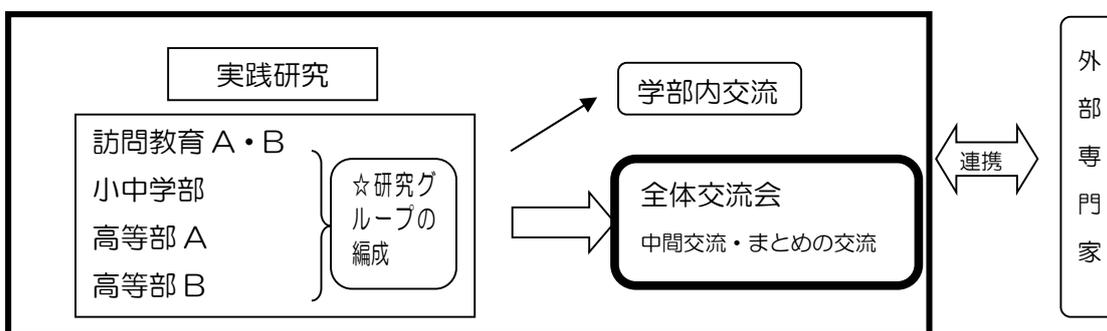
STEP 5

- ・各実践の報告・交流（各グループによる意見交流など）を通して、実践に基づく指導方法の共有を図る。

(児童生徒の変容についての検証、次の実践の評価、改善のまとめ)

(2) 研究推進体制及び構成員

実践研究グループは各学部の状況を踏まえて設定する。



図：校内研究体制

5 評価

- ・最終的なグループ協議
- ・職員評価アンケート

第1章 研究概要

6 校内研究推進日程

令和5年度

研究回	月	日	曜	研究内容	
第1回	4	25	火	全校研究日①	全校研究計画に対する説明・意見交流
第2回	5	23	火	全校研究日② 実践研究日①	今後の取り組みの確認提案 研究テーマの選定、対象生徒の選定、情報の分析・検討、研究計画の確認、研究テーマの選定、推進計画の作成(学習状況の確認、対象生徒の選出、課題の抽出)
第3回	6	20	火	実践研究日②	実践計画検討・作成 アセスメント方法の確認(理論研究)
第4回	7	25	火	実践研究日③	実践研究の計画検討・作成、中間報告内容確認 アセスメント方法の確認(理論研究)
第5回	8	22	火	全校研究日③ (中間報告)	中間報告・協議/各グループの計画の交流
第6回	9	12	火	実践研究④	各実践研究グループにおける資料の蓄積、情報の分析と整理、課題の分析、学習活動の工夫、手立ての工夫、教材・教具の工夫など改善策の検討(アセスメントの実施、仮説に基づく指導の検討)(教科指導上の手立てや配慮の整理・充実)
第7回	10	31	火	実践研究⑤	指導実践(ケース)検討(実践資料の蓄積)
第8回	1	15	月	実践研究⑥	グループ研究まとめの確認
第9回	3	19	火	全校研究日④ (全体交流会)	今年度の成果及び課題の報告、意見交流、実践の反省、助言(全体) 今年度のまとめ、次年度の方向性

令和6年度

研究日	月	日	曜	研究内容	
第1回	4	30	火	全校研究日①	全校研究計画に対する説明・意見交流
第2回	5	28	火	実践研究日①	グループ協議 実践研究の計画検討 生徒の課題見直し・整理
第3回	6	4	火	全校研究日②	全体 校内研究のための全体研修 「アセスメントに基づいた授業改善・評価について」 北海道立特別支援センター 主任研究員 大西 修氏
第4回	6	25	火	実践研究日②	実践研究の計画検討・作成、中間報告内容確認 アセスメント方法の確認(理論研究)・指導内容の設定
第5回	7	25	木	全校研究日③ (中間報告)	中間報告・協議/各グループの計画の交流 授業実践交流、意見交流等
第6回	9	17	火	実践研究③	各実践研究グループにおける資料の蓄積、情報の分析と整理、課題の分析、学習活動の工夫、手立ての工夫、教材・教具の工夫など改善策の検討(アセスメントの実施、仮説に基づく指導の検討)(教科指導上の手立てや配慮の整理・充実)
第7回	10	28	火	実践研究④	指導実践(ケース)検討(実践資料の蓄積)
第8回	1	14	火	実践研究⑤	グループ研究まとめの確認、研究紀要まとめの確認
第9回	3	18	火	全校研究日④ (全体交流会)	校内研究まとめ(2カ年)研究成果発表交流

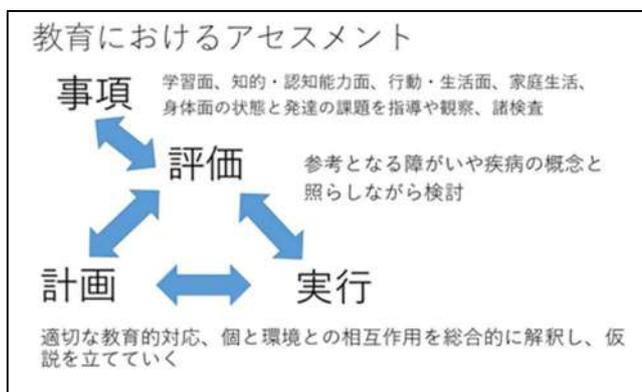
第2章

アセスメント情報の収集・分析に
よる教科指導上の手立てや配慮の
整理・充実
(令和5年度研究)

1 実践研究準備

（1）教育におけるアセスメントの確認

本分校の子どもたちを様々な角度から把握した情報を基に、その子どもの教育的課題を明らかにし、有効な指導・支援の手立てを勘案しながら進めていくこととし、教育的アセスメントについてスライド資料を使用し確認を行った。教育におけるアセスメントは単なる評価にとどまらず学習を支援し、教育の質を向上させる重要なツールであることを確認した。



（2）アセスメントに基づく具体的な取り組み

①学習状況の確認、対象生徒の抽出、課題の抽出について

それぞれの研究グループの話し合いを想定し全体で共有を図った。例えば、学校で可能なアセスメントの1つとして、複数の教師で児童生徒のつまずきや困っていることなどを持ち寄り、課題を絞り込んでいくこと。また、訪問教育のグループでは、実際に一人の児童生徒を複数の目で見ていくことは難しい面が多いが、日常の授業の中から事例を持ち寄り、検討することで子ども理解に基づく支援の方向性を共有し、資料として蓄積することを確認した。研究グループの取り組み方については、児童生徒の抽出を1名又は複数名、固定又は流動的にするなど、それぞれにあった方法で協議を進めていく。

②理論研究について

学習における達成感や心理的安定に大きく影響を与えるが、学習のつまずきがある児童生徒もおり、興味関心の個人差が大きくアセスメントの核となるものが異なることが考えられる。グループ毎に決定した対象児童生徒の必要な情報を得るために、適切なアセスメント方法を検証し実施、分析していく必要がある。

インフォーマルなアセスメント方法の例として、授業の様子から興味の示し方、参加の度合い、課題の達成度、仲間との協力の仕方、身体面や体調についてなどの情報が得られることやテストや提出物からは教科・領域別の習熟度、誤答に共通したつまずきを把握できることを挙げた。訪問教育については、前籍校の資料があれば標準学力検査を有効活用し学習スタイルを分析・把握し指導につなげることができる。フォーマルなアセスメントの例として知能検査によるつまずきの背景にある知的発達の遅れや認知能力のばらつきについても分析し、学力との関連性を図ることで子どもたちの特性を評価し、発達の見通しをもって適した指導・支援の方策を検討することができることを確認した。

そのため、グループ毎にアセスメント方法の検証・決定を行い、必要に応じて文献研究、外部専門家等の活用を考えていく。

③アセスメントの実施、仮説に基づく指導の検討

対象児童生徒にとって適切な方法でアセスメントを実施、その課題分析を行う。グループ協議において、既実践している学習活動の手立てや工夫、教材教具の交流を行い、それらの資料を蓄積することで、これまでとは違った視点から児童生徒を見つめ直し、学び方の違いや児童生徒が発するシグナルに気づいたりすることができる。児童生徒の理解、教師の指導方法、教材・教具の工夫と環境調整がかみ合い、有効な手立てとなる。また、その手立ての検証や整理を通して仮説に基づく指導の検討をしていくことができるようにしていく。

④教科指導上の手立てや配慮の整理・充実

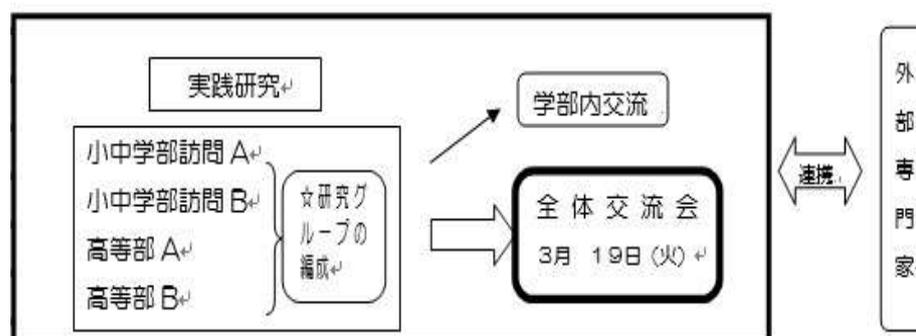
グループで指導仮説に基づいて共通理解のもと授業を実施する。教科指導上の手立てや配慮などを写真や動画、文書などで記録し、研究グループで協議できるよう資料の蓄積を進めていく。これまでの授業実践の積み上げが、2カ年計画の1年次の校内研究の取り組みの目安とする。

⑤児童生徒の変化についての検証、次の実践の評価、改善のまとめ

継続した実践を積み上げ、資料の蓄積を行い、児童生徒の変容についての検証、実践の評価、改善方法の検証を行い、各グループの研究成果としてまとめる。また、それらの各実践の報告・交流を校内研究全体で共有していく。

(3) 研究推進体制

実践研究グループは各学部の状況を踏まえて年度ごとに設定することとし、具体的な取り組み例で挙げた方法や対象生徒の抽出については流動的に取り扱う。それぞれのグループが取り組みやすい形で、協議を進めていくことを確認した。



図：校内研究体制

(4) グループ協議による研究テーマ、研究目的、研究仮説、研究内容、対象児童・生徒の設定について

研究実践計画については、右図のワークシートの形式に沿ってそのプロセスを説明した。研究テーマの設定については、教科指導にフォーカスし系統的な視点を踏まえながら教科指導上の手立てや配慮の整理・充実を図れるよう設定していくことを確認した。また、研究目的、研究仮説、研究内容、対象児童・生徒の設定についてもそれぞれ、右図の実践計画書の記入例を元にグループでの協議内容を決定していくことを確認した。また、チーム、ワークシート作成担当、主な授業者、VTRの撮影・編集、発表、記録の資料整理等、各グループで必要と考える役割分担を決定していく。

それらを中間交流会までに作成し、全体交流し、グループで計画的に実践していくことを確認した。

グループ名（高等部C）における実践研究の今後の取組（実践計画）

1. グループ研究テーマ
 (例) Aさんの数学的指導におけるアセスメント方法の検討を行い情報収集・分析を図る

2. 研究目的
 (例) アセスメントの在り方を検証し、情報を分析することで、生徒の見方とらえ方を共有する。アセスメントに基づき、授業改善に向けた取り組みを行い、教科指導力の向上を目指す。

3. 研究仮説
 (例) 日常実践の交流からアセスメントの在り方についてグループで共有しアセスメント情報を集めることで教科指導上の手立てや配慮の信頼性、妥当性が高まり教科指導力の向上につながるのではないか。

4. 研究内容
 (例) (1) 日常実践やHISIC-IV等の心理検査実施記録の有無を確認、チェックリスト、日々の授業実践記録の工夫などのアセスメントの在り方についてグループで共有する。
 (2) アセスメント情報を収集・共有する。
 (3) 児童生徒の課題の分析をし、学習活動（教材・教具）の工夫や手立て配慮の工夫について意見交流を行う。
 (4) 学習活動（教材・教具）の工夫や手立て配慮の工夫について指導実践を交流し改善策を検討する。

5. 研究日程

5/23	今後の取組の検証提案（全体） 実践計画作成に向けて（グループ） （研究チームの選定、対象生徒の選定、情報の分析・検討、研究テーマの選定）	9/12	指導実践（ケース）検討 （アセスメントの実施、仮説に基づく指導の検討） （教科指導上の手立てや配慮の整理・充実）
6/20	実践計画の作成・検討 アセスメント方法の確認	10/31	指導実践（ケース）検討（実践資料の蓄積）
7/25	実践計画の作成・検討 アセスメント方法の確認	1/15	グループ研究まとめ確認
8/22	中間報告会（全体） 各グループ実践計画の交流	3/19	全体交流会 今年度の成果及び課題の報告、確認 今年度のまとめと次年度への方向性

6. 研究組織

全体研究・研究推進の共通理解
 （学習状況の確認、対象生徒の選出、課題の抽出）
 （理論研究）（アセスメントの実施、仮説に基づく指導の検討）
 （教科指導上の手立てや配慮の整理・充実）
 （児童生徒の変化についての検証、次の実践の評価、改善まとめ）

← グループ
← グループ
← グループ

グループ名（高等部C）

役割分担等						
○ 研究チーム	○ 主担当指導者	○ 主担当指導者	○ VTRの撮影・編集	○ 資料の執筆	○ 発表	○ 記録の資料整理・写真
△△	○△	△○	○◎	△△	△○	◇◇

対象生徒の選出（例）

- ・学習活動の時間（集中力・体力など）が短い生徒
- ・オンラインで学習効果が上がりにくい児童
- ・高等部Aさんの数学（アセスメントにより実態把握と課題分析を行う）

2 グループ協議による実践計画の作成・検討(5/23、6/20)

対象生徒の選出、役割分担、研究テーマ、研究目的、研究仮説、研究内容の設定について各グループで協議を行った。計2回のグループ協議設定日に加えて必要に応じて別日を設定し実践計画を作成するなどしたグループもあった。また、研究部の担当者を各グループに配置し、グループ協議の進捗状況を分掌部会等で確認し、全体における研究の進捗状況を把握することができた。

3 中間報告会(8/22)

各グループ実践計画の交流や情報の共有、意見交流の場として、中間報告会を行った。各グループで作成した実践計画をスクリーンに写し、レジュメを確認しながら情報共有、意見交流を行った。60分間の中で4つのグループが報告を行い、互いに情報共有するとともに、今後の実践方法や校内研究の全体像を確認することができた。特に新たに設置された訪問教育の実態を含めた研究の進め方について全職員で共有できたことは、大変有意義であった。

4 指導実践検討（9/12、10/31）

各グループで協議を行う指導実践検討日を設定し、アセスメントの実施や仮説に基づく指導の検討が行われた。日程はグループごとで必要に応じて設定し、実施することを提案した。それにより、各グループで円滑に協議を行うことができた。

WISC-IVなどフォーマルなアセスメントの実施を行うグループや、授業ごとに実態を記録し、交流するグループなど、それぞれのグループが設定したアセスメント方法で実施した。また、訪問教育では教育的アセスメントに加え、心理的アセスメントと医療的アセスメントを記録できるチェックシートの考案に取り組んだ。

5 グループ研究まとめの確認(1/15)

右図のワークシート様式を参考に今年度のまとめを行った。グループごとで記入しやすい方法やまとめを行い次年度への引き継ぎができるように確認したことで、訪問教育グループは、単年度でグループの研究の仮説の検証を行い、まとめることができた。また、校内研究のまとめの記載事項については、個人情報に充分配慮することが確認された。高等部については、グループ協議において立てた指導仮説の整理と今年度残された授業時間の中でできることを整理し、次年度への引き継ぎをまとめた。

グループ名()における実践研究

1. 取り組んだアセスメント方法

「アセスメント種類」 例) 学力と学習のつまずき	「対 象」 例) 学力・基礎的学力	「方 法」 例) 観察授業 テスト 面接指導の記録 国語の活用
-----------------------------	----------------------	---

2. アセスメントの目的

例) 各教科単元個別の習得と照らし合わせ特徴づけを捉えつた授業実践に関するモニタリング

3. 話し合われた指導仮説や教科指導上の手立ての整理

それぞれ指導上実践している内容の共有から、アセスメントに基づいて其温度や発動と受け入れることを話し合い、指導内容を構築していく過程の記録

4. 指導実践の記録

グループで確認した指導の実践記録

5. 今後の課題

6. 今後の課題・要望

7. その他次年度への引き継ぎ事項

6 全体交流会

全職員が集まり意見交流を行った。4つのグループがそれぞれの実践をまとめ、研究発表を行った。成果と課題を挙げてもらい次年度への引き継ぎ事項についても意見交流し、情報共有することができ、アセスメントに基づく生徒理解が深まった。さらに、令和5年度にスタートした訪問教育について学習環境や状況についての説明があり、全校職員で共有することができた。また、単年度で研究の成果と課題から明確になった方策をまとめ、アセスメントシートの作成や授業の工夫や改善について研究成果とし、今後における児童生徒の指導に役立つものとなった。

また、高等部の2つのグループについては、アセスメントの実施と分析から指導仮説を立て、教科指導上の手立てや配慮を実践し積み上げた。これまでの成果と課題をまとめ、次年度へ引き継ぐことができた。

全体交流を通して、学校全体の病弱教育の専門性の向上につながったと考える。

7 1年目 研究の評価と改善に向けて

1年目校内研究に対する評価として、「校内研究への感想、意見、次年度に向けた希望」に対するアンケートを実施した。11名の回答があった。グループ協議における学習状況の確認や、対象生徒の選出、課題の抽出について、「できた」20%、「まあまあできた」80%という評価が占めた。対象生徒については「全員にしたら良かったのでは」という意見も出された。続いて理論研究、アセスメントの実施、仮説に基づく指導の検討についても同様の評価を占めた。加えて「外部専門家を使った研究も必要ではないか」という意見が出された。

教科指導上の手立てや配慮の整理・充実については、「今年度の取り組みの中で十分に時間が取れなかった」という反省があった。また中間報告や全体交流のあり方については、「十分な時間が無かった」、「各グループの取り組みが大変参考になった」という意見が出された。

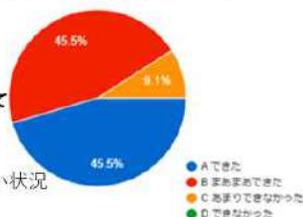
また、その他で「各種検査などに関わるアセスメントの学習を深めたい」という意見が出された。これらの意見から、1年次の校内研究推進について概ね満足な結果であり、今年度の成果を引き継ぐと共にさらなる充実に向け時間を十分に確保し理論研修に取り組んでいくこととした。

校内研究反省集計(抜粋)

学習状況の確認、対象生徒の選出、課題の抽出について

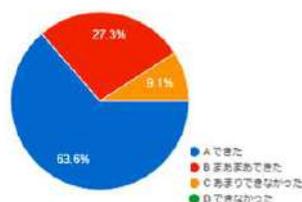
対象生徒を全員にしたら良かったかも

(対象生徒は、各グループで柔軟に対応してきた、二年目も継続していく)



教科指導上の手立てや配慮の整理・充実について

あまりできなかった
→グループ研究でまだそこまでは進んでいない状況



中間報告会や、全体交流会において研究グループ同士の実践を共有することで、専門性の向上へつなげることができたか

あまりできなかった。
→年度末の全体交流が慌ただしかった。

研究の充実や専門性の向上を図るために、外部専門家の活用を考える場合の内容について

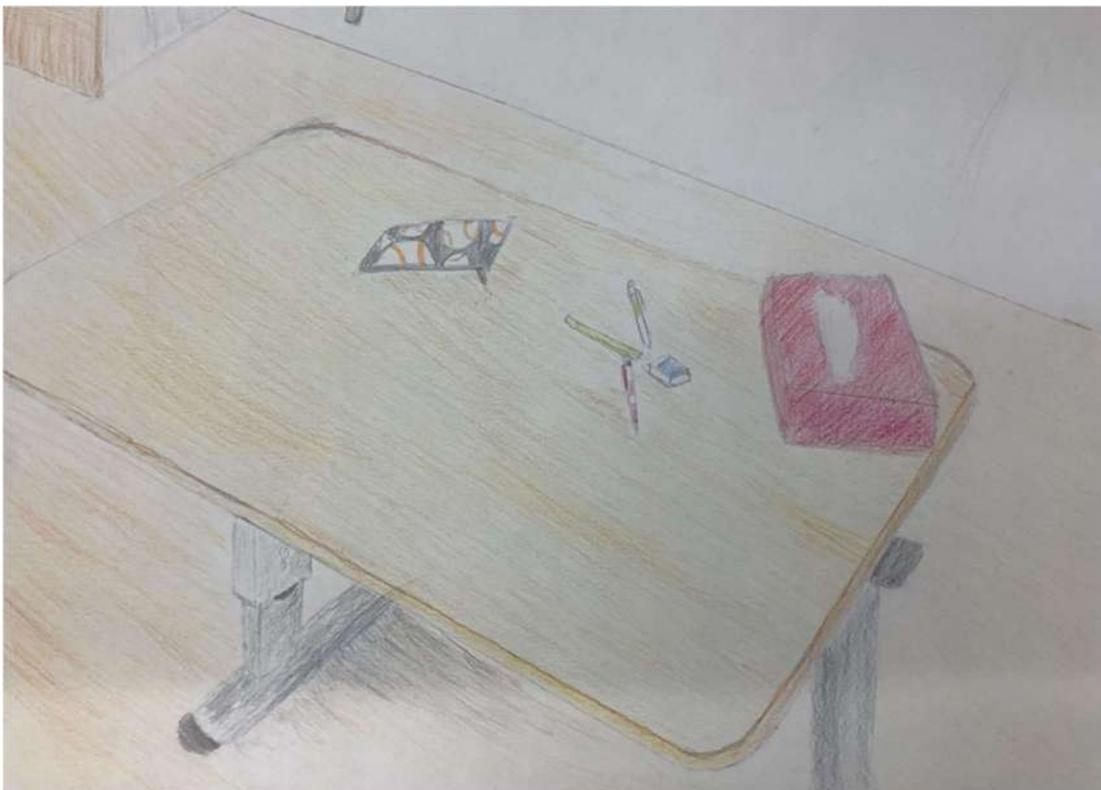
→2年時のまとめにおいて様々な生徒のアセスメントに基づいた授業改善と評価に迫りたい。

→各種検査などに関わるアセスメントの学習を深めたい。

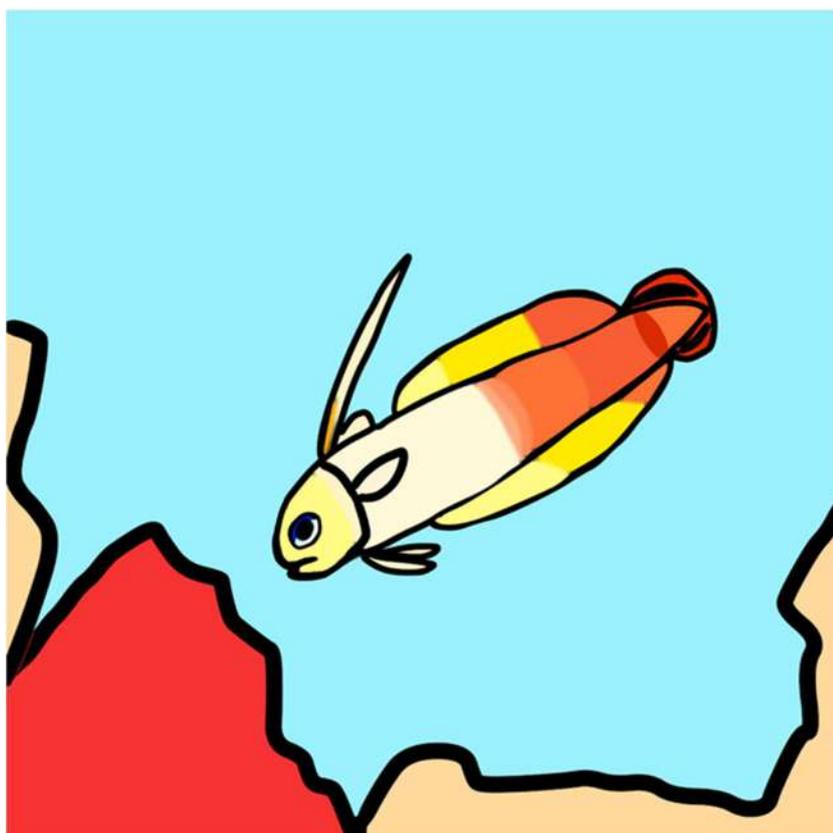
→専門性向上のためにも、アセスメントについてもっと研修を深めたい。

→校内研究を深める為の研修を行いたい

(外部専門家を活用し校内研究を深めていく)



（高等部生徒作品）



（高等部生徒作品）

第3章

アセスメントに基づいた
授業改善、評価
(令和6年度研究)

第3章 アセスメントに基づいた授業改善、評価(令和6年度研究)

1 実践研究準備

(1) 昨年度の校内研究取り組みについて

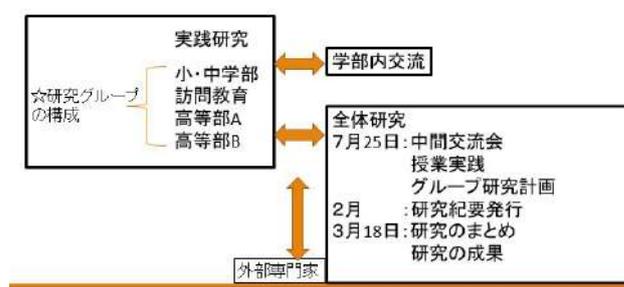
第1回校内研究では、昨年度の校内研究の取り組みと課題や研究実践の内容について説明した。取り組みについては、スライドを使用し研究主題から具体的な取り組み例を確認し、昨年度グループ協議において生徒の実態に応じて熱心なグループ協議が行われたことに触れ、その成果と課題を抜粋し説明した。

昨年度の課題としては、全体交流会の時間の確保について、研究の充実や専門性の向上を図るために外部専門家の活用について職員の評価アンケートを基に説明した。

昨年度から引き継ぐグループと新たに研究テーマを設定するグループに分けて、それぞれイメージを共有できるよう説明した。

(2) 研究体制

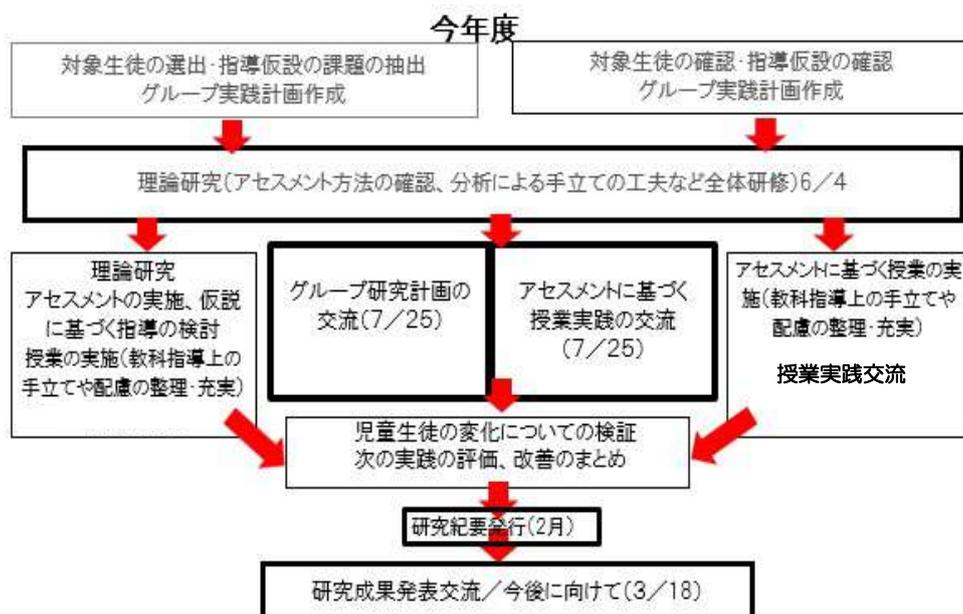
令和6年度は昨年度から引き継ぐ2つの高等部研究グループと新たに小中学部と訪問教育の研究グループを構成することを確認した。それぞれのグループに分けて、実践研究を推進していくことを説明した。



(3) 今年度の校内研究の取り組みの流れ

新たに設けた研究グループでは研究テーマや研究仮説を設定し、単年度での研究の成果をまとめていくことを確認した。そのため早い段階で全体研修として「アセスメント方法やその分析について」の説明を外部講師に依頼し全体研修を行うこととした。昨年同様に中間交流会で各グループの研究実践計画を交流し、昨年度から引き継ぐグループについては、授業実践交流も合わせて行い、これまで作成したワークシートやスライド、動画等で互いの授業改善を深める時間を設定し全体交流の充実を図る。また、今年度は校内研究まとめの年として、3月の全体交流会でグループごとに研究成果を発表し2カ年の研究成果を共有し、全体研究の成果としてまとめることとした。

グループ協議については、年間5回を設定する。教師一人ひとりの授業実践を交流し、グループで整理し積み上げを図っていくことや、研究テーマに基づいてまとめていくとした。さらに、2月に研究紀要を発行することを確認した。



2 グループ協議による実践計画の作成・昨年度までの振り返り(5/28、6/25)

昨年度から引き継いだグループは成果と課題のまとめを振り返り、情報を整理する時間となった。対象生徒については、昨年度選出した児童・生徒について確認された。研究実践グループにかかわる役割分担は昨年度のものから加除修正された。司会進行、授業担当、原稿執筆、ワークシート(研究紀要用も含む)、全体(授業実践)交流発表、全体(まとめ)交流発表など各グループで考え分担した。特にアセスメントによる指導仮説に基づく授業実践を積み上げていくことへの必要性も確認した。

今年度新たに対象生徒を選出するグループについては、研究テーマ、研究目的、研究仮説、研究内容を作成するために、日常の授業実践において気になっていること、課題と感じる子どもたちの様子や個別の指導計画や自立活動実態把握票など、これまで把握した内容について話し合われた。訪問教育のグループでは、昨年度の2つのグループの成果とまとめを引き継いだ上で、新たなメンバーで研究計画がスタートした。

3 「アセスメントに基づいた授業改善・評価について」校内研修

アセスメントの情報収集・分析による教科指導上の手立てや配慮・整理の充実に向け各グループで研究実践を進めてきたが、今年度新たにできたグループもあることから、改めてアセスメントの方法や分析方法について理解が深まる研修の機会を設けることとし、北海道立特別支援教育センター 主任研究員(肢体不自由・病弱教育室長)大西 修氏に依頼し資料の作成とご講義をいただいた。

(1) 北海道手稲養護学校三角山分校の校内研究の意義

北海道病弱・身体虚弱教育における課題と施策について、北海道教育委員会から示されている特別支援教育に関する基本方針を確認し、病気の特性や状態、心身の発達の段階等に応じて効果的に学習活動が展開できるよう、指導内容の精選や連続性に配慮した工夫などによるカリキュラム・マネジメントの充実に必要について示された。また、本分校の校内研究についてL字型構造を示し、自立活動の指導を踏まえたアセスメントに基づく教科指導を進めていくことが授業改善へとつながることを改めて説明していただいた。

(2) アセスメントについて

アセスメントの必要性についての質問には、児童生徒の理解のための情報の収集と活用のポイントについて回答があり、教育的な情報収集によるグループ協議の意義を改めて全体で確認した。また、病弱・身体虚弱教育の特徴を挙げ、教育的側面からの把握を進めて行くための項目や心理学的な情報の収集の手段である各種検査についての説明があった。本分校の研究においても複数の教師により様々な視点から情報を収集し、多面的総合的に児童生徒の理解を深めていくことの重要性を確認した。

(3) 授業改善に向けて

主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業づくりについて「授業作りの基本」5つの視点を中心に説明があった。また、その実現に向けた授業改善と病弱教育における児童生徒一人ひとりに合った主体的で対話的な深い学びに向かう課題設定の方法が示され、その解決に向かうための配慮や工夫について事例を通しての説明があった。今後も各教科の指導に当たっては、必要とされる指導上の配慮事項を十分に踏まえた上で、適切に指導していく必要性を改めて確認できた。

(4) 学習評価について

学習評価の基本的な考え方に触れ、指導と評価の一体化や評価場面や評価方法の計画の必要性を確認した。また、学習評価の基本的な考え方については、3観点に整理された学習評価の基本構造と観点別学習状況の評価を授業改善につなげる必要性を説明いただいた。カリキュラム・マネジメントの一環としての「指導と評価の一本化」については、資料を通して説明頂き、学習評価の妥当性や信頼性を高めるとともに、児童生徒の学習意欲につなげていくことの重要性を確認した。

資料

北海道手稲養護学校三角山分校 校内研修会
 HOKKAIDO BOARD OF EDUCATION
**アセスメントに基づいた
 授業改善・評価について**
 令和6年(2024年)6月4日(火) 15:00~16:00
 北海道立特別支援教育センター
 主任研究員(肢体不自由・病弱教育室長) 大西 修

内容

- 1 北海道手稲養護学校三角山分校の校内研究
- 2 アセスメントについて
- 3 授業改善に向けて
- 4 学習評価について
- 5 まとめ

1 北海道手稲養護学校三角山分校の校内研究

北海道の病弱・身体虚弱教育における課題と施策

- QOL(生活の質)の維持・向上を目指し、病院等の関係機関との連携を図った指導や支援の充実
- 訪問教育を受けている児童生徒の学びの充実に向けた、オンライン授業やICT活用による**指導内容や方法の充実等**、高い専門性に基づいた教育の提供

病気の特性や状態、心身の発達の段階等に応じて効果的に学習活動を展開できるよう、指導内容の精選や連続性に配慮した工夫等によるカリキュラム・マネジメントの充実を図ります。

「特別支援教育に関する基本方針(令和5年度~令和9年度)」北海道教育委員会(令和5年3月)

北海道手稲養護学校三角山分校校内研究①

<研究主題>
『子どもたちの教科指導における資質・能力の育成につながるアセスメントの探究』

<今年度の実践内容と具体的な取組例>

- ステップ1 学習状況の確認
対象生徒の選出、課題の抽出
- ステップ2 理論研究
- ステップ3 アセスメントの実施
仮説に基づく指導の検討
- ステップ4 教科指導上の手立てや配慮の整理・充実
- ステップ5 次の実践の評価、改善のまとめ

「北海道手稲養護学校三角山分校 令和6年度校内研究について」

北海道手稲養護学校三角山分校校内研究②

指導の根拠
 学習指導要領
 各教科の目標・学習
 単元・題材計画

個の視点
 (個々の場につけてはしんじつへの指導、数の実態を踏まえた手立てや配慮から教科等の指導に生かす)

授業
 個が1特性に基じた指導→手立て、配慮

個別の指導計画
 自立活動の指導

系統的な視点(各教科等の目標や内容を子どもたちの学びの場へ生かす) / 個別の教育支援計画(個別化コース)

学びの振り返り(学対的振り返り)
 (チェックリストの活用)

「北海道手稲養護学校三角山分校 令和6年度校内研究について」

2 アセスメントについて

演習 なぜアセスメントが必要なのでしょう

(1) 児童生徒の理解の進め方

主観的な理解

- 多くの教師の多面的な観察
- 児童生徒のよさを見出す

客観的な理解

- 検査等の資料を基に判断
- より正確に児童生徒を理解

共感的な理解

- 内面的な変素を重視
- 心の動きを受け止める

情報の収集と活用のポイント

- 継続的に情報を収集する。
- 収集した情報を整理する。
- 検査や調査の結果のみで判断することなく、児童生徒を見つめ、総合的に判断する。

「特別支援学級担任のハンドブック(新訂版)」北海道立特別支援教育センター(令和4年)

(2) 指導に向けた情報の収集

医学的な情報

- 既往歴や診断の有無
- 健康状態
- 服薬や発作の有無
- 検査結果 等

心理学的な情報

- 知的発達の状態
- 社会性の発達の状態
- 検査等の結果 等



保護者からの情報

- 成育歴や教育歴
- 家庭環境
- 生活習慣
- 保護者の願い 等

教育的な情報

- 学習の状況
- 興味・関心
- 社会性、コミュニケーション
- 指導上の配慮事項 等

「特別支援学級担任のハンドブック(新訂版P62)」北海道立特別支援教育センター(2022年)

(3) 教育的側面からの把握①

～病弱・身体虚弱の例～

【本人の障害等に関すること】

A 病気の理解

- 自分の病気等に関付き、受け止めているか。
- 自分のできないこと・できることについての認識をもっているか。
- 自分のできないことに関して、悩みをもっているか。
- 自分の行動について、自分なりの自己評価ができるか。
- 自分のできないことに関して、先生や友達への援助を適切に求めることができるか。
- 家族が、子供に対して病気等についてどの程度教えているか。
- 子供自身が、認定こども園・幼稚園・保育所、児童発達支援施設等で病気等を認識する場面に出会っているか。

「障害のある子供の教育支援の手引」文部科学省(2021年)

(3) 教育的側面からの把握②

B 病気等による学習上又は生活上の困難を改善するために、工夫し、自分の可能性を生かす能力

- 病気等による学習上又は生活上の困難の改善のために、自分から工夫するなどの積極的な姿勢が身に付いているか。
- 病気等による学習上又は生活上の困難の改善のために、補助的手段の使い方や扱い方を理解しているか。

C 自立への意欲

- 自分で周囲の状況を把握して、行動しようとするか。
- 周囲の状況を判断して、自分自身で安全管理や危険回避ができるか。
- できることは、自分でやろうとする意欲があるか。
- 受け身となるような行動が少ないか。

「障害のある子供の教育支援の手引」文部科学省(2021年)

(3) 教育的側面からの把握③

D 対人関係

- 実用的なコミュニケーションが可能であるか。
- 協調性があり、友達と仲良くできるか。
- 集団に積極的に参加することができるか。
- 集団生活の中で、一定の役割を果たすことができるか。
- 自分の意思を十分表現することができるか。

E 学習意欲や学習に対する取組の姿勢

- 学習の態度(着席行動、傾聴態度)が身に付いているか。
- 学習や課題に対して主体的に取り組む態度が見られるか。
- 学習や課題に対する理解力や集中力があるか。
- 年齢相応の態度や姿勢で学習活動に参加できるか。
- 読み・書きなどの技能や速度等はどうか。

「障害のある子供の教育支援の手引」文部科学省(2021年)

(4) 心理学的な情報の収集

	検査名	対象	時間
知能検査	田中ビネー知能検査V	2歳～成人	30～60分
	改訂版鈴木ビネー知能検査	2歳～18歳11か月	35～50分
	WISC-IV知能検査	5歳～18歳11か月	60～90分
	WIPPSI-III知能検査	2歳6か月～7歳3か月	40～70分
発達検査	新版KABC-II	2歳6か月～18歳11か月	30～120分
	遠城寺式・乳幼児分析的発達診断検査	0歳～4歳8か月	約15分
発達検査	PVT-R 絵画話し発達検査	3歳～17歳3か月	約15分
	新版K式発達検査	0歳～成人	15～20分
適応機能検査	新版Vineland-II 適応行動尺度	0歳0か月～22歳11か月	20～60分
	S-M社会生活能力検査 第3版	乳幼児～中学生	約20分

※知能検査については、検査結果を修正せず、検査時の専門員による評価が行動観察等によるものと、適切な対応を講ずることが重要。 「障害のある子供の教育支援の手引」文部科学省(令和3年6月)

3 授業改善に向けて

(1) 主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業づくり

「授業づくりの基本」5つの視点

【趣旨】

学習指導要領の趣旨を踏まえ、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善を推進するため、北海道の全ての先生方で共有したい授業改善の指針を「授業づくりの基本」として5つの視点で整理

【5つの視点】

- 【視点1】身に付けさせたい力を明確にした単元づくり
- 【視点2】「ねらい」から「まとめ・振り返り」までの1単位時間のデザイン
- 【視点3】全ての児童の学習を深める授業技術
- 【視点4】全ての児童が落ち着いて取り組める学習環境
- 【視点5】学びに主体性をもたせる家庭学習

北海道教育庁学校教育課義務教育課「令和6年度 小(中)学校教育課程編成の手引」

ア 身に付けさせたい力を明確にした単元づくり

- 単元(題材)を精選して、身に付けさせたい力を明確にし、評価標準を設定する。
 - 単元(題材)のまとまりを言語して単元構成をする
 - 身に付けさせたい力を明確にし、評価標準を設定する
- 評価標準に応じた学習活動を、単元全体を通してバランスよく位置付ける。
 - 授業のつながりや考え、観点ごとの評価標準と、それを達成するための学習活動をバランスよく位置付け、学びの過程を構築する
- 児童生徒の学習状況を評価標準に基づいて見取る。
 - 単元全体の評価標準を明確にし、児童生徒の学習状況を見取りながら授業を行い、自らの指導を振り返る

「令和2年度小学校教育課程編成の手引」(北海道教育委員会(令和2年3月))

イ 1単位時間で完結できる導入・展開・終末の時間配分をする

◆評価標準に基づいて最も効果的な学習活動を、時間配分を工夫して組み立てる

「思考力・判断力・表現力」の育成をねらった例		「知識・技能」の習得をねらった例	
導入 7分	学習課題 見通し	導入 7分	学習課題 見通し
展開 30分	個人で思考 ペア・集団で思考	25分 展開	個人で習得 ペア・集団で習得
	個人で思考		まとめ
終末 8分	まとめ 振り返り	終末 15分	個人で習熟 振り返り

「令和2年度小学校教育課程編成の手引」(北海道教育委員会)

本時のねらいに正対した学習活動を位置付け、評価標準との関連を図る。

◆児童生徒の思考の流れや課題解決の筋道を明らかにして、学習活動を位置付ける

「ねらい」から「まとめ」「振り返り」まで、①～④の順で学習活動を構築

- 本時のねらいの明確化
- 本時のねらいに基づいた評価標準の設定
- 本時のねらいに基づいた学習活動の位置付け

学習課題
見通し
課題解決
まとめ
振り返り

評価標準は、ねらいを実現した児童生徒の姿として具体的に なっていますか。

まとめや振り返りを位置付けていますか。

「令和2年度小学校教育課程編成の手引」(北海道教育委員会(令和2年3月))

(2) 主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善と病弱教育の課題

- 主体的な学び**
学ぶことに興味や関心を持ち、自己のキャリア形成や未来に向けて、見通しをもって粘り強く取り組み、自ら返って次につなげる。
 - 得意によって取り扱えない教材がある
 - 学習意欲が生じる
- 対話的な学び**
教師と一対一で学習している子供同士の姿、教職員や地域の人の対話、グループに考えること等を選び、自己の考えを広げ深め、無言で一人で学習している。
 - 教師と一対一で学習している
 - 無言で一人で学習している
- 深い学び**
習得・活用・探究という学びの過程の中で、「見方・考え方」を働かせながら、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、考えたり、思いや考えを基に創造したりすること。
 - 病状が日々変化する
 - 活動に制限がある

「特別支援学校学習指導要領解説 特別編(幼稚園・小・中・高)」(文部科学省(平成30年))

(3) 病弱者である児童生徒に対する教育を行う特別支援学校

ア 指導内容の精選等

イ 自立活動の時間における指導との関連

ウ 体験的な活動における指導方法の工夫

エ 補助用具や補助的手段、コンピュータ等の活用

オ 負担過重とならない学習活動

カ 病状の変化に応じた指導上の配慮

「特別支援学校学習指導要領解説 各教科等編(小・中・高)」(文部科学省(平成30年3月))

ア 指導内容の精選

個々の児童(生徒)の学習状況や病状の状態、授業時数の制約等に応じて、指導内容を適切に精選し、基礎的・基本的な事項に重点を置くとともに、指導内容の連続性に配慮した工夫を行ったり、各教科等(各教科・科目等)相互の関連を築いたりして、効果的(系統的・発見的)な学習活動が展開できるようにすること。

「特別支援学校学習指導要領解説 各教科等編(小・中・高)」(文部科学省(平成30年3月))

- 個々の児童生徒の学習状況を把握する
- 病状の状態や学習時間の制約を考慮する
- 発達段階や特性等も考慮する

イ 自立活動の時間における指導との関連

健康状態の維持や管理、改善に関する内容の指導に当たっては、(主体的に)自己理解を深めながら学びに向かう力を高めるために、自立活動における指導との密接な関連を保ち、学習効果を一層高めるようにすること。

「特別支援学校学習指導要領解説 各教科等編(小・中・高)」(文部科学省(平成30年3月))

「特別支援学校校長のハンドブック(選集)【自立活動】」(国立特別支援教育センター(令和3年3月))

ウ 体験的な活動における指導方法の工夫

体験的な活動を伴う内容の指導に当たっては、児童(生徒)の病状の状態や学習環境に応じて、間接体験や疑似体験、仮想体験等を取り入れるなど、指導方法を工夫し、効果的な学習活動が展開できるようにすること。

「特別支援学校学習指導要領解説 各教科等編(小・中・高)」(文部科学省(平成30年3月))

「個別教育システム活用ガイドブック 第2版」(株式会社内閣府教育総合研究所(令和2年3月))

エ 補助用具や補助的手段、コンピュータ等の活用

児童(生徒)の身体活動の制限や認知の特性、学習環境等に応じて、教材・教員や入力支援機器等の補助用具を工夫するとともに、コンピュータ等の情報機器などを有効に活用し、指導の効果を高めるようにすること。

「特別支援学校学習指導要領解説 各教科等編(小学校・中等部)」文部科学省(平成30年3月)

※ 児童配慮くWi-FiEILM-ターゲッド型端末等



「特別支援教育におけるICT活用」文部科学省(令和2年10月)

オ 負担過重とならない学習活動

児童(生徒)の病気の状態等を考慮し、学習活動が負担過重となる又は必要以上に制限することがないようにすること。

「特別支援学校学習指導要領解説 各教科等編(小学校・中等部)」文部科学省(平成30年3月)



個々の児童生徒の病気の特性を理解し日々の病状の変化等を十分に考慮した上で、学習活動が負担過重にならないようにする

カ 病状の変化に応じた指導上の配慮

病気のため、姿勢の保持や長時間の学習活動が困難な児童(生徒)については、姿勢の変換や適切な休養の確保などに留意すること。

「特別支援学校学習指導要領解説 各教科等編(小学校・中等部)」文部科学省(平成30年3月)

医療との連携により日々更新される情報を入手するとともに、適宜、健康観察を行い、病状や体調の変化を見逃さないようにする必要



4 学習評価について

(1) 学習評価の基本的な考え方

学習評価とは・・・

学校における教育活動に関し、児童生徒の学習状況を評価するもの

- 子どもたち自身が自らの学びを振り返って、**次の学びに向かう**ことができるようにする。
- 「子どもたちにどういった力が身に付いたか」という学習の成果を的確に捉え、教員が**指導の改善**を図る。

指導と評価の一体化

評価場面や評価方法の計画

「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について(概要)」中央教育審議会(平成26年)

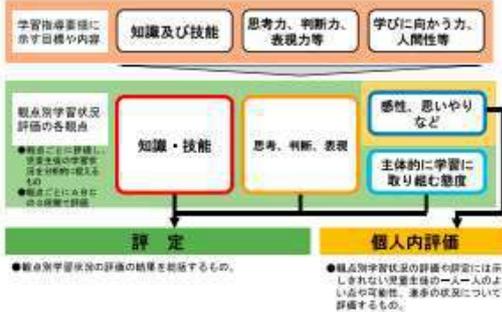
(2) 学習評価の主な改善点について

(1) 各教科等の目標及び内容を「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」の資質・能力の三つの柱で再整理した新学習指導要領の下での**振興と評価の一体化を推進する観点**から、観点別学習状況の評価の観点についても、これらの資質・能力に関わる「知識・技能」、「思考・判断・表現」、「主体的に学習に取り組む態度」の3観点に整理して示し、設置者において、これに基づく適切な観点を設定すること



「小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校等における児童生徒の学習評価及び指導要領の改善等について(通知)」

○ 学習評価の基本構造



「学習評価の在り方ハンドブック」文部科学省 国立教育政策研究所教育課程研究センター

(3) 観点別学習状況の評価について

ア 「知識・技能」の観点

各教科等における**学習の過程を通じた個別の知識及び技能の習得状況**について評価を行うとともに、それらを既存の知識及び技能と関連付けたり活用したりする中で、**概念等を理解したり、技能を習得したりしているか**について評価する。

学習で得た知識や技能を他の学習場面において、児童生徒が生かしているかどうかを見定める。

「児童生徒の学習評価の在り方について(概要)」中央教育審議会

イ 「思考・判断・表現」の観点

各教科等の知識及び技能を活用して課題を解決する等のために必要な思考力、判断力、表現力等を身に付けているかどうかを評価する。

- ・教科等の見方・考え方を働かせる場面の設定
- ・多面的に物事を捉え、自分の思いや考えを他者に伝える場面の設定

→

- ・児童生徒の思考の過程を読み取っていくことが重要
- ・児童生徒の内面での変化を感じながらのアプローチ

『児童生徒の学習評価の在り方について(報告)』中央教育審議会

ウ 「主体的に学習に取り組む態度」の観点

知識及び技能を獲得したり、思考力、判断力、表現力等を身に付けたりするために、自らの学習状況を把握し、学習の進め方について試行錯誤するなど自らの学習を調整ながら、学ぼうとしているかどうかという意思的な側面を評価する。

「取り組む態度」としているが、表面的に分かりやすい行動のみで評価しないように留意する。

『児童生徒の学習評価の在り方について(報告)』中央教育審議会

(4) 授業改善につながる学習評価とする

評価規準・・・学習指導要領に示す目標の実現の状況を判断するよりどころ

指導と評価の一体化を図るために

- ① 児童生徒の学習改善につながるものにしていくこと
- ② 教師の指導改善につながるものにしていくこと
- ③ これまで慣行として行われてきたことでも、必要性・妥当性が認められないものは見直していくこと

『児童生徒の学習評価の在り方について(報告)』中央教育審議会(平成31年)

(5) カリキュラム・マネジメントの一環としての「指導と評価の一体化」

②評価結果を以下のような改善に生かす

- ・児童生徒の学習の改善
- ・教師による指導の改善
- ・学校全体としての教育課程の改善
- ・校務分掌を含めた組織運営の改善

Plan 指導計画等の作成

Do 指導計画を踏まえた教育の実施

Check 児童生徒の学習状況、指導計画等の評価

Action 授業や指導計画等の改善

①日々の授業の下で児童生徒の学習状況の評価

「学習指導」と「学習評価」は学校の教育活動の根幹であり、教育課程に基づいて組織的かつ計画的に教育活動の質の向上を図る「カリキュラム・マネジメント」の中核的な役割を担う

『令和4年度特別支援教育教育課程編成の手引』北海道教育委員会(令和5年3月)

5 まとめ

1 アセスメントについて

- 複数の教師により様々な視点から情報収集し、多面的・総合的に児童生徒を理解する。

2 授業改善に向けて

- 各教科の指導に当たって必要とされる指導上の配慮事項を十分に踏まえた上で、適切に指導する。

3 学習評価について

- 学習評価の妥当性や信頼性を高めるとともに、児童生徒の学習意欲の向上につなげる。

4 中間交流会(7/25)

中間交流会では、全体研修として各グループの授業実践と研究計画の意見交流を行った。

小中学部グループは新たにグループ研究のテーマを設定し、推進計画を立てた。生徒の心理的安定に生かせるような学習目標や学習課題の把握を中心に研究を進め、設定した研究仮説や研究内容を全体で共有することができた。

訪問教育グループは、昨年度の訪問Aグループの成果を引き継ぎ、新たな研究テーマを設定した。それぞれ訪問先によって学習環境も異なる中、アセスメントによる指導と評価の充実を図るため、推進計画を立てた。対象生徒を限定せず、教師一事例の研究を進めていくことを確認した。

高等部AとBグループでは昨年度から引き継ぎ、今年度の推進計画を交流した。また、授業実践交流として動画を通して、指導仮説と検証について説明し全体で共有を図ることができた。

5 児童生徒の変化についての検証と実践の評価、改善のまとめ(9/17、10/28、1/14)

グループ協議において必要に応じて日程を変更・追加しながら、研究協議を深めた。設定された日程の後に、協議記録用紙にまとめ分掌部会で研究部内での共有を図ることができた。

どのグループも授業実践を積み上げその配慮や手立てを整理し、共有することができた。指導仮説の検証や個々の事例における有効な配慮や手立ての積み上げが資料となり、研究テーマに基づく協議がなされていた。

3月の全体交流で各グループの研究成果の発表交流を行うので、2月中までに様式に成果をまとめ、研究紀要の作成を目指した。

6 全体交流会(研究紀要と研究成果の交流)

各グループにおいて取り組んできた研究と成果についてまとめを終えることができた。令和5年度の取り組みと合わせて5つのグループの成果とまとめができた。各グループからの成果とまとめを校内研究の成果としてまとめていくと共に、これらを資料として研究紀要に掲載し、全体交流を予定している。

7 成果と課題(研究の評価と改善に向けて)

校内研究に対する評価として、「2ヵ年実践の個人評価・研究部評価」として、成果・課題等を記入するアンケートをGoogleフォームで実施した。実践を行った8割の教員である23名から、次のような回答が得られた。

1. 研究主題、研究の目的について

①日々の実践での課題を取り上げ、L字型構造の個の視点と系統的な視点を踏まえたアセスメントの在り方や指導について検証することで、子どもたちの見方、とらえ方の向上を目指すことができましたか。

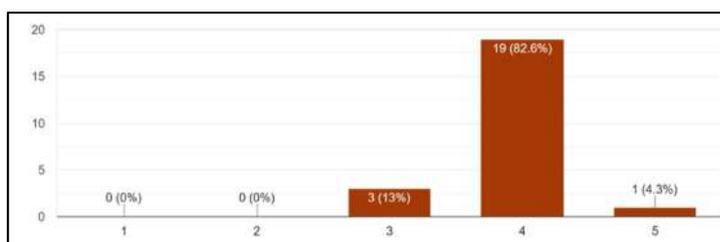
【記述】

・訪問教育学級で学習する児童生徒にとって、1日の授業の中でも治療による体調の変化があり、アセスメントを行いながら、学習を進めることで児童生徒にとって安心して学習する環境を作ることができると思う。

・生徒の様子や変化の様子を交流し共通理解しながら実践することができたので効果的であった。

・アセスメントをグループで行う際に自立活動の課題も共通理解を深めながら指導仮説を立てることができた。

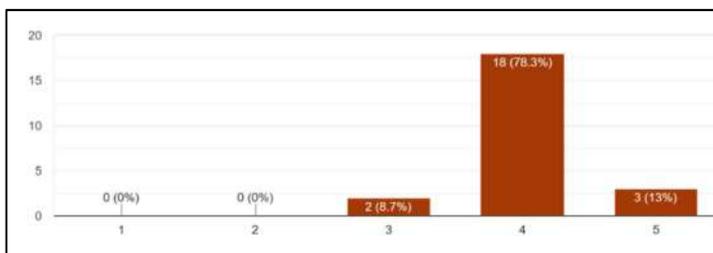
・アセスメントについては、よくできていると思う。



②アセスメントに基づき、授業改善に向けた取り組みを行い、子ども達の将来につながる資質・能力の育成を図ることができましたか。

【記述】

- ・児童生徒のアセスメントを行うことで、興味関心、長所短所を把握し、できることを増やし、達成感、自己肯定感を味わわせ指導ができた。
- ・様子を踏まえてアプローチを変えたり、授業改善することができたのは良かった。
- ・グループで授業実践の交流ができた。
- ・訪問においては、アセスメントに基づく、授業改善をそれぞれ個別に取り組んでいると思うが、組織研究は高まっていない。

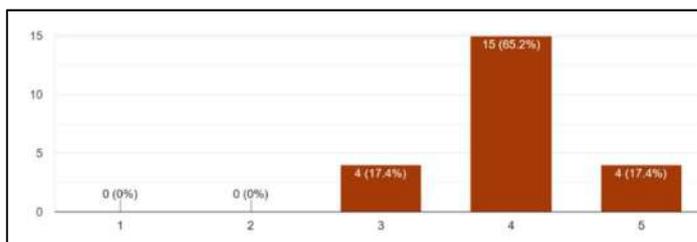


2. 研究仮説や取り組みについて

①研究仮説に基づいて研究の目的を達成することができましたか。

【記述】

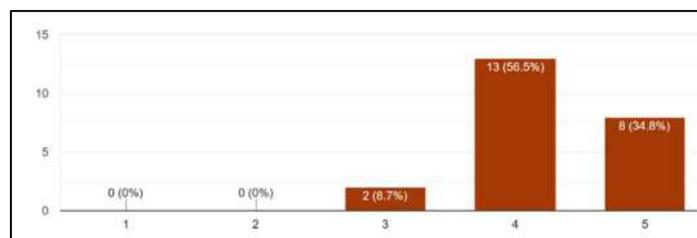
- ・アセスメントの実施、分析、検証することで教科指導に手立てや工夫につながった。
- ・訪問においては、個別の指導計画を作成することになったが、そのためには、観点別学習状況の実際の研修時間が足りないと考える。



②学習状況の確認、対象生徒の選出、課題の抽出方法についてグループで確認して積極的に取り組みましたか。

【記述】

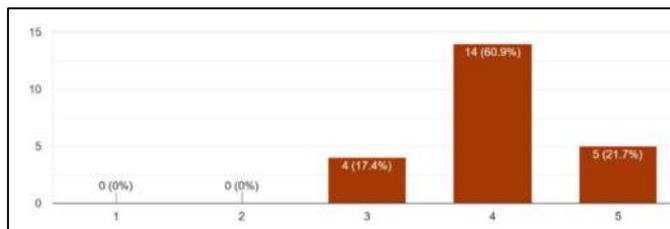
- ・グループ内で共通理解を図りながら取り組めたと思う。
- ・訪問教育学級は、担当ごとに事例をまとめることができた。
- ・訪問においては、個別指導のため、各担任から、児童生徒の病状を踏まえた配慮事項の交流を頻繁にもつことができた。



③理論研究は必要に応じてグループまたは全体で取り組みましたか。

【記述】

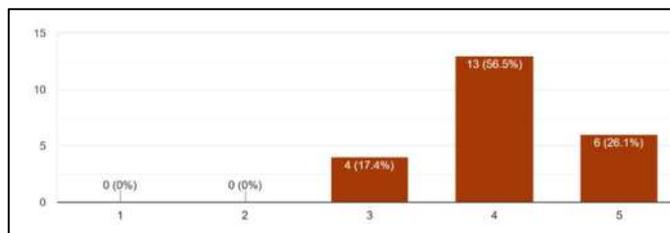
- ・計画的に取り組めた。
- ・WISC-IV の分析結果をもとにグループ内で指導への活用を図るためグループ以外の先生に解説してもらい共通理解を図ることができた。全体での理論研究をグループでの研究へ活かすことができた。
- ・訪問においては、理論面の研究ができた分野とできていない分野の両面が見られた。



④アセスメントの実施、仮説に基づく指導の検討についてグループで取り組みましたか。

【記述】

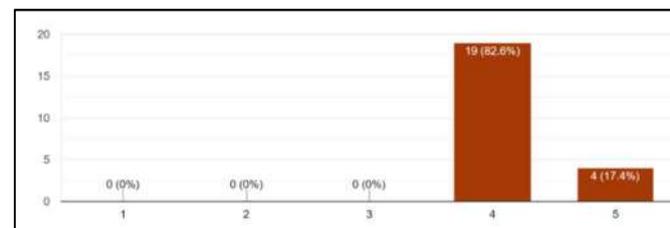
- ・取り組むことができた。
- ・二カ年計画の中で、無理なく指導を検討し、生徒の成長とともに研究成果を実感できた。
- ・訪問においては、個別にアセスメントをして、指導計画を工夫していると思われるが、組織として指導の検討には至っていない。



⑤中間報告会や、全体交流会において研究グループ同士の実践を共有することで、専門性の向上へつなげることができましたか。

【記述】

- ・研究グループ内で実践の共有はできた。
- ・特に訪問教育や違う学部での取り組みがわかりとても有意義であった。
- ・中間報告会で他のグループの実践研究の状況を把握できたことはよかった。

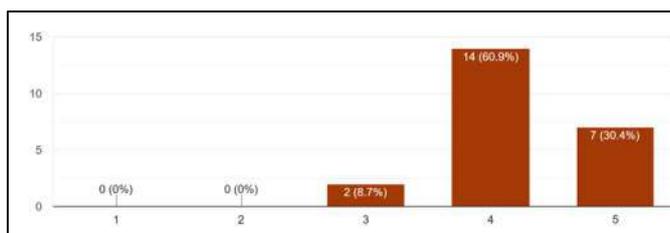


3. 研究部の校内研究全体促進について

①研究主題と目的、その設定の理由は適切であったか。

【意見】

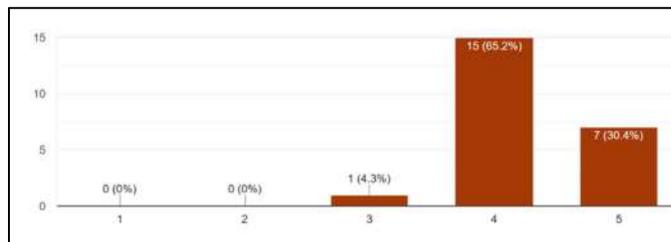
- ・適切に行えた。
- ・よい。
- ・全体としては、適切であった。



②研究仮説は研究の目的を達成するために適切であったか。

【意見】

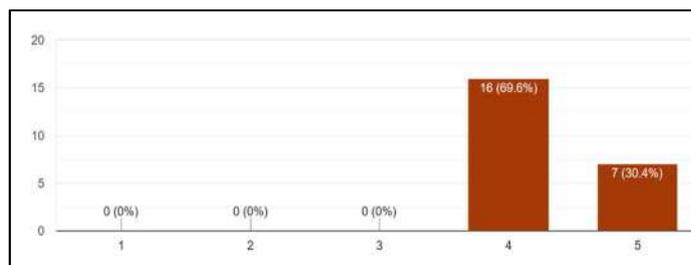
- ・アセスメントの実施、分析することで児童生徒の見方や捉え方が広がり、教科指導の充実につながった。
- ・よい。



③グループ協議について、対象児童生徒の選出、課題の抽出方法は適切であったか。

【意見】

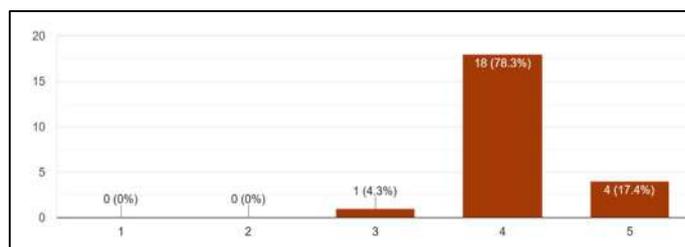
- ・適切だった。
- ・グループ内で適切に抽出できたと考える。
- ・対象生徒の抽出については、グループごとに実態に応じて臨機応変に取り組めていて良かったと思う。



④理論研究の設定やその方法は適切であったか。

【意見】

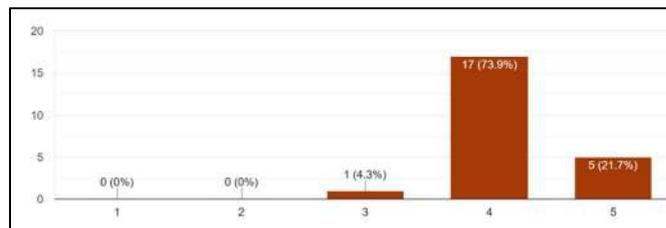
- ・必要に応じて適切に行うことができた。
- ・必要に応じて外部講師や他の研修会とうまくリンクさせるなどもっと充実を図ることができるのではないか。
- ・おおむね適切であった。



⑤校内研究のまとめに向けて、中間報告会や全体交流会の設定やその推進方法は適切であったか。

【意見】

- ・計画的に行うことができた。
- ・よいが研究授業や授業公開週間などを設定して、互いに授業を見合う機会があってもよいと思う。
- ・よかったと思う。



⑥その他、研究部の全体推進に関わってご意見がありましたらお書きください。

【意見】

- ・本研究を通してアセスメントに対する意識が高まったと感じる。アセスメントの結果と発達段階や障がい特性の相関性理解は特別支援教育の根幹でもあり、継続的な研修が必要だと思う。
- ・1年間お疲れ様でした。

4. 次年度の校内研究主題設定に向け、日ごろ課題と感じていることや、研究で専門性を高めたいと感じていることなどがありましたらご記入ください。

- ・病気療養児の理解
- ・訪問教育学級は場合によっては免許外の教科も指導することになり、指導力に差が出てしまう場合があること。病気療養児の心理についてより学びたい。
- ・卒業後の進路が、継続入院だけではなく、地域に戻ったり、大学に行ったり、一人暮らしをしたり、働くなど様々な進路が考えられるようになってきたのかなと思う。なので、今一度学習内容の整理を行うと良いかなと思う。なかなか大きいことなので、研究に絡めていくとスムーズに進められるかなあと思う。
- ・授業改善がしやすくなるように、単元の目標と評価の設定方法についての研究やそれを明確にした単元計画作成について共通理解を図ること。
- ・病気理解について
- ・訪問においては、準ずる教育を推進しており、前籍校に戻るため、5段階の学力が1や2の児童生徒の指導法を研究する。(個人的にはしています)

「1. 研究主題、研究の目的について」の各項目の評価平均は、①が3.9、②は4.0となり、概ね「できた」の意見が多い結果となった。肯定的な記述が多かったが、訪問教育学級における今後の課題も記述されていた。

「2. 研究仮説や取り組みについて」の各項目の評価平均は、①が4.0、②が4.3、③が4.0、④が4.1、⑤は4.2となり、概ね「できた」の意見が多い結果となった。こちらも肯定的な記述が多い中、訪問教育学級からは、観点別学習状況についての研修の必要性があげられていた。

「3. 研究部の校内研究全体促進について」の各項目の評価平均は、①が4.2、②が4.3、③が4.3、④が4.1、⑤は4.2となり、概ね「できた」の意見が多い結果となった。研究部の評価として肯定的な意見が多い中、具体的な改善案として、必要に応じて外部講師やほかの研修会とリンクさせる案があがっていた。⑥のその他にも、具体的な意見として、アセスメント結果と発達段階や障がい特性の相関性理解についての継続的な研修の必要性があげられていた。

「4. 次年度の校内研究主題設定に向けて」では、病弱支援学校の校内研究として必要な視点があげられていた。病気療養児の理解、実態差に応じた指導力の向上、目標と評価の設定を明確にした単元計画の作成、多様な進路への指導についてなどである。

グループごとに熱心にアセスメントを生かした授業実践に取り組み、その配慮や手立てを整理し仮説検証することができたと考える。しかし、全体として、授業改善をしていくための評価方法にばらつきがあり、教科指導の充実に向けて理論研修が不十分であったのではないかと考えられる。グループ協議において対象児童生徒に対して取り組んできた成果を全体のものとしていくためにも、次年度以降も教育的アセスメントの意義を振り返りつつ個別の指導計画や自立活動実態把握票へ反映するなど、理論研究を深化できるよう教師一人ひとりのスキルを高めていく必要がある。この評価の結果と反省は、2か年の取り組みを引き継ぐとともに、次年度以降に生かしていくこととする。

資料

グループまとめ

- ・ 訪問教育 B
- ・ 訪問教育 A
- ・ 高等部 A
- ・ 高等部 B
- ・ 小中学部

グループ名（ 訪問教育 B ）における実践研究

＜グループ研究テーマ＞

治療中の心身の状態等に配慮した指導から主体的な学びへ
～病院訪問教育における、アセスメントを踏まえた教科指導の充実～

＜研究の目的＞

一人ひとりの体調に配慮した中で、主体的に活動に取り組める、適切な活動内容、指導等の工夫について検討し、教科指導の充実につなげる。

＜研究仮説＞

急性疾患や治療にかかわる知識を深め、それを踏まえて日々のアセスメントを行い、体調に合わせた指導を充実させていくことで、児童生徒の主体的な学びにつながると共に、指導力の向上につなげることができるのではないかと。

＜研究内容＞

- (1) 個々の児童生徒の急性疾患や治療の過程について、文献調査を行い、情報共有を行う。
- (2) 学習・活動を実施した際の「児童生徒の治療や疾患による心身の状態」や、「児童生徒の主体性にかかわるアセスメント（行動観察）」を行い、教員間で情報共有する。
- (3) アセスメントをもとに、各自手立てを考えて実践を行う。
- (4) 実践内容を交流し、情報共有とともに授業の改善を図る。

1. 取り組んだアセスメント方法

「アセスメント領域」	「対象」	「方法」
医療・教育・心理面の実態	前籍校での行動観察	引き継ぎ資料
体調	授業での様子、治療の状況	観察指導の記録
主体性	授業での様子	観察指導の記録

2. アセスメントの実際

研究の目的は、一人ひとりの体調に配慮した中で、様々な工夫について検討し、教科指導の充実につなげることであり、その前提として治療や病気の基礎理解が必要である、と話題が出た。そこで、アセスメントの前段階として、7月上旬に血液疾患にかかわるミニ研修を行った（資料の作成にあたってはMEDIC MEDIA「病気が見える vol.15血液」を引用、参考）。

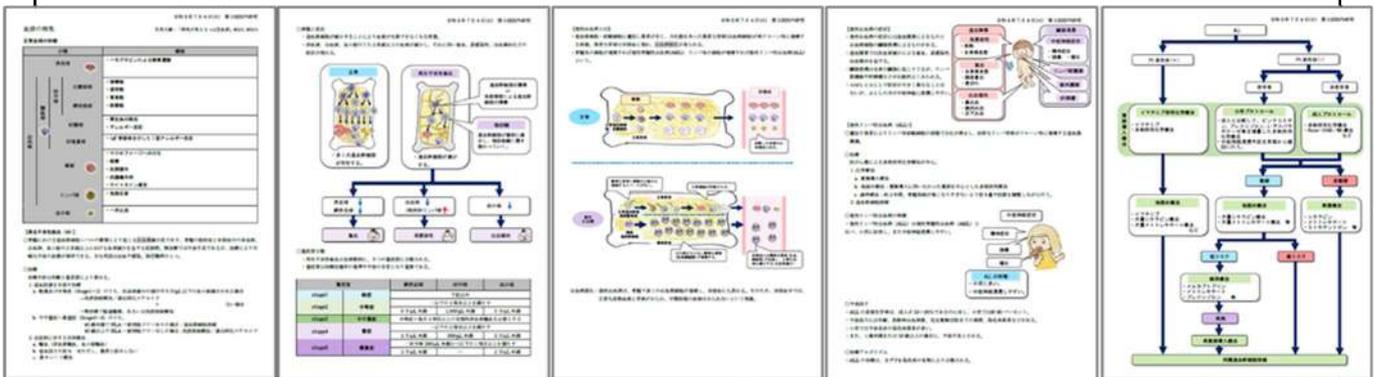


図1 グループBでのミニ研修資料

① 対象児童生徒（5名）の「医療的アセスメント」、「教育的アセスメント」、「心理的アセスメント」を記入

年度当初に、引き継ぎ資料等から行っているアセスメントだが、改めて3つの項目（項目は、標準「病弱児の教育」テキスト p.89-90 参考）に各自整理し、7月下旬に情報共有を行った。

「医療的アセスメント」

- ・入院日
- ・体調により活動場所を変える。(良好…机と椅子/不良…ベッドに座りベッドサイドテーブル使用、もしくはベッドに横になり授業を受ける) 等

「教育的アセスメント」

- ・国語/算数の進捗や様子
- ・前籍校での取り組み 等

「心理的アセスメント」

- ・前籍校での様子
- ・性格について
- ・病名等の告知について 等

② 「学習時の体調と主体性のアセスメント表」を記入

「どんな心身状態」のときに、「どんな活動に、どう取り組んでいたのか」(体調と主体性)をアセスメントする表で、訪問Bグループで検討し、作成した。「主体性」の定義については、NITS 独立行政法人教職員支援機構ホームページに掲載されているピクトグラムにある5つの姿を、主に「主体性にかかわる実現したい子どもの姿」としてイメージし、アセスメントしていくことを確認し、9月上旬に、各児童生徒の表の情報共有を行った。



図2 NITS 独立行政法人教職員支援機構ホームページに掲載されているピクトグラム

- ・体調のアセスメント…疾患にかかわる知識を深めた上での日々の体調観察記録
 体調の表記 …◎：とても良い (90~100)
 ○：良い (60~80)
 □：普通 (40~50)
 ■：良くない (0~30)

- ・主体性のアセスメント…取り組みの様子を行動観察で記録
 主体性の表記 …◎：90~100
 ○：60~80
 □：40~50
 ■：0~30

※A~Eの事例では次の点に配慮している。

「治療の様子」…児童の様子や薬等の記載を、大まかな表現に書換(もしくは割愛)している。

このアセスメントにより、「どんな心身状態」のときに、「どんな活動に、どう取り組んでいたのか」(体調と主体性)をアセスメントするシート。
 一、心身状態に適した、主体的に取り組める活動内容がわかる。

教科	児童生徒名						
月	日	単元	活動内容	体調	治療の様子	主体性	様子

体調

◎…とても良い (90~100)
 ○…良い (60~80)
 □…普通 (40~50)
 ■…良くない (0~30)

主体性

◎…90~100
 ○…60~80
 □…40~50
 ■…0~30

主体性にかかわる実現したい子どもの姿

興味や関心を高める
 共通の情報を収集する
 自分と結び付ける
 結び強く取り組む
 振り返って次へつなげる

NITS独立行政法人教職員支援機構ホームページより

表1 アセスメント表

3. 話し合われた指導仮説や教科指導上の手立て配慮など

※ 児童生徒A～E

4. 指導実践の記録

※ 各児童生徒ごとに取り組み内容記入

例

7月	算数 「 」	活動内容記入 考える活動。	□	○	児童の様子を記入 考えることができた。
	仮説を立てる＋授業改善				
9月	オンライン授業 国語 「 」	活動内容記入	○	(割愛)	◎ 児童の様子を記入 笑顔も見られ、初めて知る ことにも納得する様子。
10月	オンライン授業 国語 「 」	活動内容を選択肢から いくつか選ぶ。 読み聞かせ	□	(割愛)	○ 画像を提示しながら読み聞 かせ。それまで静かだったが、読み始めると、 <u>前回より笑顔が多く、笑う場面も</u> <u>あった。途中で思ったこと</u> <u>を話す等、関心をもって話</u> <u>を聞く様子。</u>
	オンライン授業 国語 「 」	活動内容を選択肢から いくつか選ぶ。	○	(割愛)	□ <u>最初は元気にやりとりして</u> <u>いたが、活動を始めたの</u> <u>ち、イラストが少なく、い</u> <u>いまわしも難しかったため</u> <u>か、反応は少なかった。</u>

表2 仮説を立てて授業改善を始めた直後の様子

5. 今年度の成果

- 病気にかかわる理解を深めたことで、その後の児童のことばや活動の様子などについて、理解した上でかかわることができる場面があり、授業の改善に生かすことができた。
- 日々のアセスメントから、どのような体調のときに、どのような活動を行うと主体的に取り組んでいるか（もしくはとりくめていなかったか）を確認してきたことで、児童の姿を具体的に想定しながら授業改善をすることができた。それにより指導の充実につなげることができた。
- 体調に大きな変動があったこともあり、常という訳にはいかなかったが、以前と比べ児童がより主体的に取り組む姿が見られるようになった。
- アセスメントを丁寧に行うことで、主体的な学びをするためには、どのような教材や環境が必要であるのか、個々に合わせた支援を行うことができた。

- 教師があえてアセスメントを意識することで、日々病状が変化する入院治療中の児童生徒への特別な配慮をより丁寧に行うことができ、児童生徒の学習意欲や主体的な学びにつなげることができたので、目的に叶っていた。
- グループ内で病院訪問教育におけるアセスメントの意義を検討し、医療的・教育的・心理的の三項目に絞って各児童生徒のアセスメントを行うことにより、個々の児童生徒の実態に応じた授業づくりへつなげることができた。
- アセスメントを行うことで、対象の生徒がどのような状況において主体性を向上させることができるのかという傾向をつかむことができ、日々の指導を考える上での参考となった。

6. 今後の課題・展望

- 北楡グループに限らず、訪問の場合は、1人の児童生徒に対しての指導支援がマンツーマンで行われることになっている。支援の共有を図ることで、拠点校としての財産になるのではないかと感じた。
- 今年度の取り組みは良かったが、病院訪問の生徒は治療方針の転換などで急に指導期間が予定より短くなったりすることがよくあるので、同じ対象生徒の実態を長期間追う方法は合わないのかもしれないと思った。
- マンツーマンだからできることもあると思います。入院治療中であっても学習への意欲をもち前に進もうとしている児童生徒に寄り添った教育活動をしていくためにも、関係機関との信頼関係を基盤とした連携、教師の資質の向上が望ましいと思います。
- 病院訪問教育におけるアセスメントに基づいた授業作りのノウハウの蓄積。
- エクセルのアセスメント表に少し使いにくさを感じたため、より活用しやすい記録の仕方については改善が必要。

7. その他次年度への引き継ぎ事項

- 各事例で使用した教材・教具の引継（PCデータも含めて）。
- 疾患に応じた指導のノウハウの引継。
- 次年度の訪問部の体制や児童生徒の状況も踏まえて、充実した実践研究ができるとうい。
- 次年度、在校の教員が年度途中で急遽訪問の指導に入る可能性があることも踏まえ、3観点のアセスメントを、児童生徒の状況を端的に伝えるツールとして活用できたらよい。

グループ名（ 訪問教育 A ）における実践研（R5）

1. グループ研究テーマ
 - ・個々の病状に配慮し、児童生徒の基礎学力をはぐくむオンライン（対面）授業の工夫改善
2. 研究の目的
 - ・入院している児童生徒の指導に当たっては、ひとり一人の状況に応じた様々な配慮した授業の在り方を研究し、児童生徒の基礎学力を育むためのオンライン（対面）授業の工夫改善を図る。
3. 研究仮説
 - ・ひとり一人の病状に応じた手立てをオンライン授業に工夫することにより、児童生徒の基礎学力を育むことができるだろう。
4. 研究内容
 - （1）やる気をおこすための手立ての工夫
 - （2）わかるための手立ての工夫
 - （3）できるための手立ての工夫
5. 取り組んだアセスメント方法

「アセスメント領域」		「対 象」	「方 法」	
		面談	面談、行動観察	診断的アセスメント
意欲	やる気を起こす	授業態度	面談、行動観察・指導の記録	形成的アセスメント
理解	わかる 理解度	授業	行動観察・指導の記録	形成的アセスメント
学力	できる	授業	回答	総括的アセスメント

6. アセスメントの実際

日常・行動観察・指導の記録から

○小学部低学年男子 A さん

（診断的アセスメント）：主体的に取り組むことができるが、周りのことが気になり注意散漫である。学習意欲は、非常にあるが、知的障害があり、学習の進度はゆっくりである。学習の見通しが持てるように日程を提示する。

（形成的アセスメント）：言葉の説明だけでなく、説明を可視化する。アニメーションなどを活用することで、興味を持たせる。

（総括的アセスメント）：学習内容を可視化することで理解を促す。スモールステップで出題する。

○小学部中学年男子 B さん

（診断的アセスメント）：主体的に取り組むことができるが、注意が散漫で周りのことが気になることが多い。児童を称賛することばの工夫。椅子に座ると疲れやすい、集中すると目が疲れるなどの状態が見られた。

（形成的アセスメント）：板書及び教具を工夫する。細かいところはアップにして、注意点を強調する。学習時間の全体の流れがわかりやすいよう工夫する。

（総括的アセスメント）：類似プリントの工夫。復習プリントでは1問間違えたら、再度、類似問題をプリント1枚（6問程度）出題する。

○小学部中学年男子 C さん

(診断的アセスメント)：知的障害があり、理解力はゆっくりであるが、学習意欲は高い。平仮名、カタカナ、数字の学習を中心に行っている。人と話をすることに苦手意識があり、話しも、発音が不明瞭である。

(形成的アセスメント)：児童が大好きなキャラクターやシールを題材にする。

(総括的アセスメント)：大きな声を出しゆっくり話すことを意識し、音読する学習を取り入れる。

○小学部中学年男子 D さん

(診断的アセスメント)：主体的に集中して取り組むことができる。学習意欲は、非常にあり、学習の理解力もある。

(形成的アセスメント)：教科書で示しているページや三角定規・分度器の調べ方等具体的に示す方法を工夫する。

(総括的アセスメント)：オンライン学習時のコンパスや分度器を正確に使用できる工夫をする。

○中学部女子 E さん

(診断的アセスメント)：小学生の中学年頃から不登校になり、学習の空白があることから、学習することに対しては、主体性はなく、受動的な部分が多い。周りのことや音、話し声等に反応し、注意が散漫で、離席することがある。

(形成的アセスメント)：音読することに抵抗感がある。生徒の興味・関心が湧くような「絵本」を読書活動に使用する。

(総括的アセスメント)：イラストが得意なため、読書活動時の学習プリントにイラストを描く時間を設ける。また、ラベルプリンターを使用し、ローマ字入力の学習をした。

7. 話し合われた指導仮説や教科指導上の手立て配慮など

・児童生徒へ診断的アセスメント(行動・指導観察)を行い、個々の性格や実態、状況を把握し、病状に配慮しながら、個々の基礎学力をはぐくむオンライン(対面)授業の工夫改善をテーマにし、入院している児童生徒ひとり一人に応じた様々な配慮した授業に当たることにした。指導する内容としては、児童生徒への形成的アセスメントで(ア、やる気をおこすため、イ、わかるため、ウ、できるため)3つの手立てを指導の工夫し、指導の実践成果で総括的アセスメントをする研究を行うことしました。

8. 指導実践の記録

<事例1>

1 対象児童

小学部 低学年 男子 Aさん

2 実態の把握

(1) 児童の状況(診断的アセスメント)

学習に対しては、主体的に取り組むことができるが、周りのことが気になり注意散漫である。学習意欲は、非常にあるが、知的障害があり、学習の進度はゆっくりである。

(2) 具体的な手立てと工夫（形成的アセスメント）

ア やる気を起こすための手立ての工夫

イ わかるための手立ての工夫

ウ できるための手立ての工夫

3 具体的実践（総括的アセスメント）

(1) やる気を起こすための手立ての工夫（資料1-1、2）

・1回の学習の見通しをもてるように、学習一覧を提示したり、授業の最初に今日やることを伝えたりする。

＜実践の成果＞見通しがもてることで、次に何をやるのか、あとどれくらいで終わるのが分かり、集中を持続させることができた。

・正解できた際には、大いに称賛する。（拍手、言葉での称賛、パーティション越しにハイタッチ）

＜実践の成果＞称賛することで、次の問題にも自分から取り組もうとする姿勢が見られた。

・児童の好きなキャラクターの活用。（ホワイトボードにイラストを描き、励みになる一言を加える。）

＜実践の成果＞毎回の授業の楽しみになっており、「〇〇って言わせて」など児童が自分から言ってもらいたいメッセージを伝えることもあった。

(2) わかるための手立ての工夫（資料1-3）

・説明を可視化する。（PPのアニメーション機能の活用）

＜実践の成果＞言葉の説明だけでなく、アニメーションなどを活用することで、興味をもち、理解を促すことができた。

(3) できるための手立ての工夫（資料1-4）

・授業で習ったことをタブレットの学習アプリで、復習。

＜実践の成果＞タブレットで、一問一答の問題が出題されることにより、集中して取り組むことができ、できることを自分でも確認しながら取り組むことができた。

・スモールステップでの問題の出し方の工夫。

＜実践の成果＞簡単なものから出題し、児童に自信をつける。

＜事例2＞

1 対象児童

小学部 中学年 男子 Bさん

2 実態の把握

(1) 児童の状況（診断的アセスメント）

学習に対して主体的に取り組むことができるが、注意が散漫で周りのことが気になることが多い。

(2) 具体的な手立てと工夫（形成的アセスメント）

ア やる気を起こすための手立ての工夫

イ わかるための手立ての工夫

ウ できるための手立ての工夫

3 具体的実践（総括的アセスメント）

(1)やる気を起こすための手立て（児童を称賛することば）（資料2-1）

・小学部男子は治療の影響により、椅子に座ると疲れやすい、集中すると目が疲れるなどの状態が見られたため、学習時間を30分にして学習活動に取り組んだ。特に、算数が好きで得意としているので、自分なりの方法で解こうとする場面が多く見られた。その時を好機ととらえ、「今の考え方は、小学校6年生の勉強、中学校1年生のここの勉強に結びつく考え方だね」との声かけをする。

＜実践の成果＞ほめ言葉を加えると、とても喜び学習時間を延長することが多々見られた。

(2)わかるための手立ての工夫（板書及び教具の工夫）（資料2-2）

・オンラインの期間が長かったので、よりわかる指導を考え、全体の構成をしっかりと板書を心がけて取り組んだ。細かいところはアップにして、注意点を強調した。学習時間の全体の流れがわかりやすいよう、実施期日、学習目標、学習活動、まとめをしっかりと視覚に記憶するとともに、ノートもそのように書くことを指導した。

＜実践の成果＞授業のまとめでは、本時の目標とする内容やポイントが「わかった」ことを確認し、練習問題を行うことできた。

(3) できるための手立ての工夫（類似プリントの工夫）（資料2-3）

・Aくんは、理解が速いのですぐに問題に取り組み、「できた」とする場面が多かったので、確かめをすることを指導すると、その時は間違いを発見することができた。しかしながら、復習プリントを出す。と、100点をとることができずミスを減らすことはできなかった。そこで、復習プリントでは1問間違えたら、再度、類似問題をプリント1枚（6問程度）出すこととした。

＜実践の成果＞注意深く計算し解答し提出したので、100点を続けることができた。

＜事例3＞

1 対象児童

小学部 中学年 男子 Cさん

2 実態の把握

(1) 児童の状況（診断的アセスメント）

知的障害があり、理解力はゆっくりであるが、学習意欲は高い。

(2) 具体的な手立てと工夫（形成的アセスメント）

ア やる気を起こすための手立ての工夫

ウ できるための手立ての工夫

3 具体的実践（総括的アセスメント）

(1) やる気を起こすため、できるための手立ての工夫（資料3-1、2）

本児童は慣れていない人と話することに苦手意識がある。また、話をしている時も、身体の特徴から発音が不明瞭になってしまう。自分が困ったり、助けてほしいと思ったりしたときに、自ら他者に気持ちを伝えられるようになってほしいという保護者の願いもある。

＜実践の成果＞児童が大好きなユーチューバー「フィッシャーズ」を題材に使用することで、音読に興味を持って取り組むことができた。一生懸命大きな声を出して、ゆっくり話すことを意識しながら音読することで、他者が自分の話していることを理解しているという達成感につながったと思われる。

<事例4>

1 対象児童

小学部 高学年 男子 Dさん

2 実態の把握

(1) 児童の状況（診断的アセスメント）

学習に対しては、主体的に集中して取り組むことができる。学習意欲は、非常にあり、学習の理解力もある。

(2) 具体的な手立てと工夫（形成的アセスメント）

イ わかるための手立ての工夫

ウ できるための手立ての工夫

3 具体的実践（総括的アセスメント）

(1) わかるため、できるための手立ての工夫（資料4）

コロナ感染対策期間中に病院の学習室に入ることができなくなり、オンライン授業での算数（図形）、国語等を指導することとなる。オンライン学習（Chromeのクラスルームを使用）では、児童の顔・表情をお互いに見ることができるが、手元の教科書やノートを見る際には、パソコンやipadのカメラを視写体を写すように移動させなければならないため、非常に手間がかかり、臨場感に欠けるものであった。もっと実際に児童の側で指導するような、方法はないかを模索し、上の方法を行うこととした。算数（図形）では、角度を調べ、角度の合同、平行などをオンライン学習時に具体的に示し教えた。国語では、語句や内容の説明等の際に使用した。

<実践の成果> 対面学習では、児童の横にいて、直接話したり、指で示したりすることができるが、オンライン学習時には、お互いの顔の部分は見えているが、手元や指示したい場所が示すことに時間がかかり、臨場感に欠けることが多かったが、この方法を使うとすぐに気をつけたいことや示したいこと、児童に分度器や定規の使い方が画面で見え、また児童の表情も見えるため、確認しながら授業を進めることができ、学習の内容も理解できたようだった。

<事例5>

1 対象生徒

中学部 女子 Eさん

2 実態の把握

(1) 生徒の状況（診断的アセスメント）

小学生の中学年頃から不登校になり、学習の空白があることから、学習することに対しては、主体性はなく、受動的な部分が多い。周りのことや音、話し声等に反応し、注意が散漫で、離席することがある。

(2) 具体的な手立て（形成的アセスメント）

ア やる気を起こすための手立ての工夫

イ わかるための手立ての工夫

ウ できるための手立ての工夫

3 具体的実践（総括的アセスメント）

ア やる気を起こすための手立ての工夫（資料5-1）

・音読することに抵抗感があるため、生徒の興味・関心が湧くような「絵本」を読書活動に使用した。

<実践の成果>本生徒の国語科の読書活動を題材として絵本を使った、学習を行った。活字が少ない絵本を使用することで、音読に対する不安や抵抗感が薄れ、人前でも抵抗なく声を出して読めるようになった。また、印象に残ったイラストを模写したり、新しい登場人物を想像して描いたりすることで、物語の内容を深く読み取る様子も見られ、効果的だった。「本を最後のページまで読みたい」という気持ちが芽生えるよう、本人好みの画や話が書かれている絵本を選び、黙読から始めた。黙読後、本人に音読したい方（右ページ or 左ページ）を決めてもらい、教師と交互に音読する活動を繰り返し行うことで、抵抗なく声を出せるようになった。

イ わかるための手立ての工夫（資料5-1）

・イラストを描くことを得意としているが、人前で描くことに消極的であるため、読書活動の中で、学習プリントにイラストを描く時間を設けた。

<実践の成果>ラベルプリンターを使用し、パソコンでのローマ字入力の前段階とした学習をした。ローマ字の読み書きに対する苦手意識があり、ローマ字表に執着していたが、短い絵本のタイトルをローマ字打ちしてシールを作り、プリントに貼る活動を繰り返すことで、表に頼らず徐々に自分の力で入力するようになり、本人の自信につなげることができた。

9. 今年度の成果

今年度初めから1学期中は、コロナ感染対策で病院への通常の2時間の学習ができなくなり、週3回2時間のオンライン学習と15分の対面学習を行ったが、2学期からは通常の訪問学習を行えるようになった。児童生徒への診断的アセスメントを行い、実態や特徴、性格を把握した上で、治療や治療に伴う体調不良を考慮しながら、学習を進めることができた。また、形成的アセスメントを行うことで児童生徒ひとり一人に合わせた教材を工夫し、称賛の言葉をかけながら、やる気をおこすための手立て、わかるための手立て、できるための手立てを工夫しながら行うことで、オンライン学習や対面学習において総合的アセスメントでも一定の学習の成果は上がったと考えられる。

10. 今後の課題・展望

今年度は①やる気を起こす②わかる③できる、の3つの形成的アセスメントの視点から、手立ての工夫に取り組んできた。今後はこれらの始点の内容を「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「主体的に学ぶ態度」の3つの観点から学習成果の評価を整理していくことが必要である。このことが、本研究の医大訪問部会の研究テーマである授業改善を一層促し、教師一人一人の指導の質を高めることにつながると考える。

11. その他次年度への引き継ぎ事項

医大の学習スタイルは、マンツーマンでの指導であるため、他の先生方の実践の工夫点を交流する機会が少なかったが、本研究を通じて、工夫のポイントを交流することができた。

是非、実践の交流機会の拡充や、ICTを活用した実践の工夫については、本校全体の実践研究にもつながるので、引き継いでいくことがよいと考える。

資料 1-1

月	日	曜日
---	---	----

きょう 今日のがくしゅう

①おんどく

②かんじをかこう

③「て」のつくことばあつめ

④ぶんをよもう

⑤かんじかるた

⑥ひきざん (①タイパッド→②プリント)

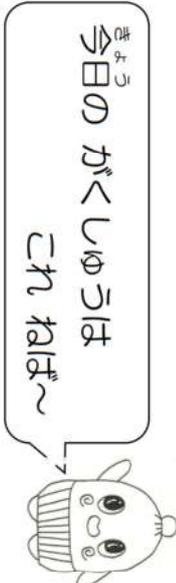
⑦あといくつ

⑧たしざん

⑨これ なんじ?

⑩おたのしみかがくしゅう

はじめとおわりには
あいさつをしましよう



せんぶ おわったら、
かんばったソールを
はろう!

資料 1-2

10にん あつめるにはあと なんにん ひつよう?

10

2 ← 8 →

資料 1-3

あといくつ (1-1)

10にん すわるにはあと なんにん?

あといくつ (1-1)

10にん すわるにはあと なんにん?

なにがどうする？

えをみて、えにあらうぶんをかいてみよう。



エント ○○が□□。



エント ○○が□□。



エント ○○が□□。

・はしる
□にはいる
ことば

・いぬ
・ねこ
・くるま
ことば

なにがどうする？

○えをみて、えにあらうぶんをかいてみよう。



エント ○○○○が△△。



エント ○○○○が△に



エント ○○○○が△を

□のことば
・よむ
・のぼる
・たべる

△のことば
・きく
・ほん
・アリン

○のことば
・おじさん
・コアラ
・おとこのこ

(1) やる気をおこすための手立ての工夫

○児童生徒のやる気をおこさせる言葉

Aさん：小3女子 Bさん：小4男子 Cさん：小6男子 Dさん：中2女子を想定し、実際に発言した言葉や、これから使う予定の言葉

- <国語>
- ①Aさんの音読を聞いているとその場面が自然に思い浮かんでくるね！文字を正確に読んでいて、とにかく上手です。
 - ②Bさんは、新しい漢字を書くとき、へんやつくりの名前を言っているね。すばらしい練習方法だな。
 - ③Cさんは、登場人物の気持ちを自分の経験をもとに考えているから、説得力があるね
 - ④Cさんは読書が好きですね！小学校の高学年ごろから、中学校の3年生くらいまでが人の記憶力が最もある時期です。年をとると覚えても忘れやすくなるけど、Cさんが読書で覚えた内容は一生覚えていきますよ。
 - ⑤Aさんのノートは字がきれいで見やすいし、何を勉強したのかしっかりと書いてくれているので、クラスの模範になると思う。
 - ⑥Bさんの音読は、言葉を強く読んだり、弱くよんだり音の大きさを工夫して読んでいて場面の様子が伝わってくるね、音読のセンスいいですね！
 - ⑦Cさんは、先生と分担して音読したとき、進んで長く読んでいたね！やる気が全面に出ている素晴らしい！
 - ⑧Bさんは、日頃から多くの文章に触れているので、登場人物の気持ちを表す言葉を見つけるのが速いね。

- <算数>
- ①Cさんは、初めの頃、算数が苦手だと言っていたけど、今は全然、苦手意識は感じないよ。
 - ②Cさんは、九九や繰り上がり、繰り下がりの計算力があるので、計算のやり方を見えたと正しい答えを導けるので、もっと自信をもつていいよ。
 - ③Bさんの解き方は、中学校1年生の数学のこの考え方につながっているんだよ。センスいいなあ！
 - ④Dさんは、答えは間違えたけど、ひとつ目の式を2倍してXの係数をそろえたところや、2つの式を足してXを消去しようとしたところは、しっかりとできているよ。移項したときに-5にするのを忘れたただけだね。おしいなあ！
 - ⑤Cさんは、あと5分しかないのに「練習問題までやってみよう！」の言葉を聞いて、先生もますますやる気が出てきたなあ！今日のことは、お母さんにも伝えておくといいよ。
 - ⑥Cさんの説明は、具体的でわかりやすいから算数の苦手な子もわかるようになると思うよ。
 - ⑦Dさんは、間違えた問題をノートにやり直し、繰り返し提出してきて立派です。このような生徒は、数学の成績が伸びるよ！
 - ⑧Aさんは、いつも自分の解き方に加えて、他の解き方も考えているね。いろいろな解き方を考えている人は、算数ができますよ！

- <国語・算数以外>
- ①Aさんは「はい」や「ありがとうございます」の言葉が身に付いているね！
 - ②Bさんはいつも授業時間を大切にしており、感心だなあ！流石6年生。
 - ③Cさんの授業開始のあいさつは、いつもはきはきしていて、気持ちがいいなあ！
 - ④Dさんは、進んで勉強の方法を聞いてきて、感心ですね！いろいろな先生方に質問してごらん。

資料2-2

(2) わかるための手立ての工夫 (帳書と教具)

7月14日 (金) 教育出版 P14

角

学習のめあて
三角じょうぎの角を用いていろいろな角の大きさを測ろう。

問題
三角じょうぎを使って①から⑦の角の大きさを測ることはできるだろうか

<ふりかえり>
三角じょうぎの角を利用すると円の中心の角の大きさがわかる。

※ 教師が情態を動かしている
な角の大きさを示す。(教師)

この三角じょうぎの角を用いて考えよう
※1~7の順に示す。

7の角

直角1つつ分

直角2つつ分

直角3つつ分

直角4つつ分

直角5つつ分

直角6つつ分

直角7つつ分

直角8つつ分

直角9つつ分

直角10つつ分

直角11つつ分

直角12つつ分

直角13つつ分

直角14つつ分

直角15つつ分

直角16つつ分

直角17つつ分

直角18つつ分

直角19つつ分

直角20つつ分

直角21つつ分

直角22つつ分

直角23つつ分

直角24つつ分

直角25つつ分

直角26つつ分

直角27つつ分

直角28つつ分

直角29つつ分

直角30つつ分

直角31つつ分

直角32つつ分

直角33つつ分

直角34つつ分

直角35つつ分

直角36つつ分

直角37つつ分

直角38つつ分

直角39つつ分

直角40つつ分

直角41つつ分

直角42つつ分

直角43つつ分

直角44つつ分

直角45つつ分

直角46つつ分

直角47つつ分

直角48つつ分

直角49つつ分

直角50つつ分

直角51つつ分

直角52つつ分

直角53つつ分

直角54つつ分

直角55つつ分

直角56つつ分

直角57つつ分

直角58つつ分

直角59つつ分

直角60つつ分

直角61つつ分

直角62つつ分

直角63つつ分

直角64つつ分

直角65つつ分

直角66つつ分

直角67つつ分

直角68つつ分

直角69つつ分

直角70つつ分

直角71つつ分

直角72つつ分

直角73つつ分

直角74つつ分

直角75つつ分

直角76つつ分

直角77つつ分

直角78つつ分

直角79つつ分

直角80つつ分

直角81つつ分

直角82つつ分

直角83つつ分

直角84つつ分

直角85つつ分

直角86つつ分

直角87つつ分

直角88つつ分

直角89つつ分

直角90つつ分

直角91つつ分

直角92つつ分

直角93つつ分

直角94つつ分

直角95つつ分

直角96つつ分

直角97つつ分

直角98つつ分

直角99つつ分

直角100つつ分

直角101つつ分

直角102つつ分

直角103つつ分

直角104つつ分

直角105つつ分

直角106つつ分

直角107つつ分

直角108つつ分

直角109つつ分

直角110つつ分

直角111つつ分

直角112つつ分

直角113つつ分

直角114つつ分

直角115つつ分

直角116つつ分

直角117つつ分

直角118つつ分

直角119つつ分

直角120つつ分

直角121つつ分

直角122つつ分

直角123つつ分

直角124つつ分

直角125つつ分

直角126つつ分

直角127つつ分

直角128つつ分

直角129つつ分

直角130つつ分

直角131つつ分

直角132つつ分

直角133つつ分

直角134つつ分

直角135つつ分

直角136つつ分

直角137つつ分

直角138つつ分

直角139つつ分

直角140つつ分

直角141つつ分

直角142つつ分

直角143つつ分

直角144つつ分

直角145つつ分

直角146つつ分

直角147つつ分

直角148つつ分

直角149つつ分

直角150つつ分

直角151つつ分

直角152つつ分

直角153つつ分

直角154つつ分

直角155つつ分

直角156つつ分

直角157つつ分

直角158つつ分

直角159つつ分

直角160つつ分

直角161つつ分

直角162つつ分

直角163つつ分

直角164つつ分

直角165つつ分

直角166つつ分

直角167つつ分

直角168つつ分

直角169つつ分

直角170つつ分

直角171つつ分

直角172つつ分

直角173つつ分

直角174つつ分

直角175つつ分

直角176つつ分

直角177つつ分

直角178つつ分

直角179つつ分

直角180つつ分

直角181つつ分

直角182つつ分

直角183つつ分

直角184つつ分

直角185つつ分

直角186つつ分

直角187つつ分

直角188つつ分

直角189つつ分

直角190つつ分

直角191つつ分

直角192つつ分

直角193つつ分

直角194つつ分

直角195つつ分

直角196つつ分

直角197つつ分

直角198つつ分

直角199つつ分

直角200つつ分

直角201つつ分

直角202つつ分

直角203つつ分

直角204つつ分

直角205つつ分

直角206つつ分

直角207つつ分

直角208つつ分

直角209つつ分

直角210つつ分

直角211つつ分

直角212つつ分

直角213つつ分

直角214つつ分

直角215つつ分

直角216つつ分

直角217つつ分

直角218つつ分

直角219つつ分

直角220つつ分

直角221つつ分

直角222つつ分

直角223つつ分

直角224つつ分

直角225つつ分

直角226つつ分

直角227つつ分

直角228つつ分

直角229つつ分

直角230つつ分

直角231つつ分

直角232つつ分

直角233つつ分

直角234つつ分

直角235つつ分

直角236つつ分

直角237つつ分

直角238つつ分

直角239つつ分

直角240つつ分

直角241つつ分

直角242つつ分

直角243つつ分

直角244つつ分

直角245つつ分

直角246つつ分

直角247つつ分

直角248つつ分

直角249つつ分

直角250つつ分

直角251つつ分

直角252つつ分

直角253つつ分

直角254つつ分

直角255つつ分

直角256つつ分

直角257つつ分

直角258つつ分

直角259つつ分

直角260つつ分

直角261つつ分

オンライン授業の工夫

教科書及び手元を部分を接写し、受信側で拡大することで、どの部分を行っているか、定期や分度器の当て方、はかり方を説明するとき役に立つ。

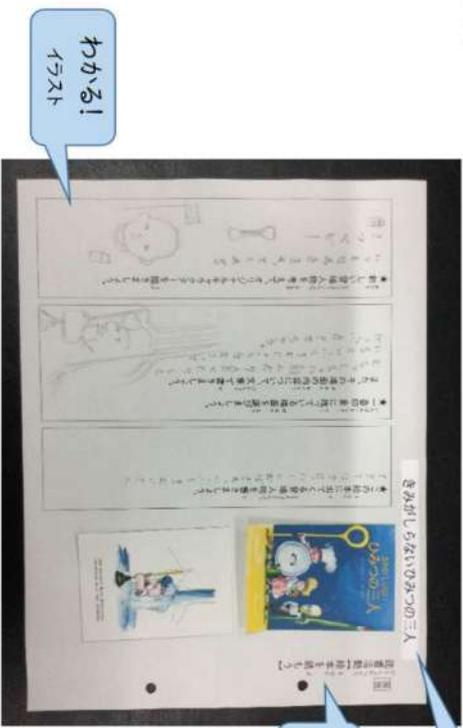


教員側のパソコンを少し（モニタ）接続し、全体を大きく移動や動きを見ることができた。

Pad を同時に meet で接続し、教科書及び手元を撮影した。

教師の手元の画像が生徒のモニターに映し出される。

定期で線を引いたり、分度器で角度を測る際、線や角度の始点がどこで、どこに合わせるのかを教えるため1台のカメラで児童に伝えることが難しいため、2台のカメラを使い示すことで、児童の表情や教師の手元のカメラから映し出される画像を見て、角度を調べたり、線を引くことができた。



わかる！
イラスト

やる気！
音読

できる！
ローマ字

グループ名（ 訪問教育 A ）における実践研（R6）

1 グループ研究テーマ

「訪問教育における単元の計画から評価まで」～個別の指導計画の作成に向けて～

2 研究の目的

児童生徒一人ひとりの病状や学習状況、様々な不安等に応じた指導方法や評価の工夫改善に取り組み、基礎学力を育むための授業の在り方を研究する。

3 研究仮説

児童生徒の実態把握や指導と評価の充実を図ることで、児童生徒の基礎学力を育み、児童生徒が安心して学習に望むことができるだろう。

4 研究内容

- (1) アセスメントの実施
- (2) 単元指導計画の作成
- (3) 個別の指導計画の指導内容交流
- (4) 3観点に沿った評価・評定のあり方

5 研究の実際

(1) アセスメントの実施

昨年の研究は、児童生徒のアセスメントをまとめ、1 授業の中でやる気を起こす、わかるための、できるための手立ての工夫を授業ごとに事例をまとめました。

今年度は、1 日の授業の中でアセスメントを行いながら、病状や体調の変化を配慮しながら授業を行う様子をまとめました。児童生徒は、それぞれ学習の状況や様々な不安等をかかえているため、一人一人に応じた指導方法や授業、評価を工夫改善することで、安心して学習に望むことができるだろう。と考え、今年度の研究を進めました。

ア アセスメントの方法、実施

(ア) 指導記録の様式の変更

- ・昨年度まで使用していた指導記録表の様式を変更し、今年度作成した様式を再度6月に変更し、児童生徒の体調の変化を記載できるようにしました。（資料 1）

(イ) アセスメントの項目について

- ・アセスメントの項目は（診断的、形成的、総括的アセスメント）の3点で、内容を再確認し、追加の内容を記載しています。

＜診断的アセスメント＞

- ⑦ 教育相談面談記録（保護者（病名、治療内容・期間、保護者のニーズ）、医師、本人の様子について（得意・不得意教科、興味関心のあるもの））

① 前籍校からの要録、通知表等、前籍校の学級担任への連絡（学習進度、学習状況（キュピナ、ロイロノート使用の状況等））

㊦ 授業前の児童生徒の体調確認、治療の様子等

㊧ 授業途中の体調の変化

<形成的アセスメント>

㊨ 学習時の児童生徒の様子（応対、集中度、積極性、態度、発言内容等）

① 学習時の理解度

㊩ ワークシート、ドリル、小テストに取り組み方

<総括的アセスメント>

㊰ ワークシート、ドリル、小テストの正答率、ノート記入内容等

(ウ) アセスメントの実施・記録

・毎回の授業するときに児童生徒にアセスメント（授業前、授業中、授業後）に行い、その内容を指導記録に記載しています。しかし、アセスメントの項目は記載していないため、その項目を追記した資料が、資料 2 となりますが、この資料は、個人情報を書かれていませんが、個人に関する情報が、記載されていますので、最新の注意が必要です。プリントにはしていません。画像の資料 2 のみとなります。

・血液疾患で入院している児童生徒の治療に伴う副作用や症状、それに対する配慮事項についてまとめた資料が資料 3 となります。現在の治療状況を把握し、どのような副作用や症状があるかを理解しながら、いろいろな配慮を行っています。

(2) 単元指導計画の作成

訪問教育は、週 3 回 2 時間の時間の制限があり、通常的时间よりかなり少ないため、ポイントを絞り、教えていく必要があります。そのため教科ごとの指導目標や学習活動、評価の基準を把握して、ワークシートやプリントを活用しながら授業を進めなくてはなりません。しかし、いつ、どの学年が、どこの地域から入院してくるか予想はできないため、年度当初に準備することはできませんが、現在、担当している、または担当していた児童生徒の単元指導計画を立てることにしました。資料 4

今回、単元指導計画を作成に当たって、「改めて単元の内容や作成の流れ、学習活動のポイント、評価項目や評価規準を確認することになり、大変勉強になった。」「作成した単元指導計画や今後作成したものを作りためて、保管することで訪問教育学部の財産になるため、今後も作成していったらどうか。」などの意見が出されました。今後の作成に当たっては、今回行ったように転入生を担当した時点で、または担当していた児童生徒の学習を想定してコンパクトで簡潔に作成できるように工夫しながら、各教科の単元指導計画を作成していきたいと考えている。

(3) 個別の指導計画の指導内容交流

個別の指導計画の指導内容等の交流を行いましたが、前期後期にまたがり、入院が継続される児童

は、1名だったため、この児童の個別の指導計画の指導内容等を中心に、項目に沿って交流及び内容の検討を行った。先生方に意見等も出してもらい文面等を修正することができました。また、2学期には入院療養する、準ずる教育を受けている児童生徒の個別の指導計画を作成に当たっては、自立活動の視点から目標や手立てではなく、各教科等の目標や手立てに生かすことが重要であることを確認しました。また、「その子ならではの個別の指導計画の作成」についての説明がありました。これらの資料については、SV-学部-02 訪問教育-R6 訪問教育グループ研究-★グループ会資料の中に入っています。

(4) 3観点に沿った評価・評定のあり方については、以下の観点に資料に沿って学習会を行いました。

- ① 3観点に沿った評価・評定のあり方について
- ② 指導と評価の一体化について
- ③ 三観点の評価の方法について
- ④ 主体的に学習に取り組む態度を高める指導について
- ⑤-1 1単元の評価の総括に係る基本的な考え方
- ⑤-2 指導の改善に生かす評価と記録に残す評価のポイント
- ⑥ 観点別学習状況の評価の総括及び評定への総括の例
- ⑦ <国語科> (小学校) 十分できる状況 A、<算数科> (小学校) 十分できる状況 A

①～⑦の項目について、資料がありました。指導に当たっての心構え、学習改善に向けた取組について、改めて勉強になりました。この資料についても、SV-学部-02 訪問教育-R6 訪問教育グループ研究-★グループ会資料の中に入っています。また、評価・評定の数値基準については、教務から出されている、数値基準があり、小学部3段階、中学部5段階の数値基準が訪問教育学級にもあてはまることを確認することができました。

6 研究の成果・課題

- (1) アセスメントについては、項目を確認することで、児童生徒の治療に伴い、何を配慮し、学習の内容や学習の評価等のアセスメントすることが共有でき、今後の学習指導に生かしていきたい。
- (2) 指導記録については、様式を整え、学習指導をする中で、児童生徒の実態や治療状況、心理的な配慮を行うことで、より充実した学習指導することで基礎な学力を育み、安心して学習に望むことができたと考える。また、確実な指導を行うことで、児童生徒の学習の評価を行う方法を確認することができ、前籍校に戻る際の引き継ぎ事項にも役立つと考える。
- (3) 個別の指導計画については、前期後期、年度をまたいで在籍する児童生徒が少ないが、在籍しそうな児童生徒がいる場合は、個別の指導計画を作成し、交流した。また、病気療養する児童生徒の個別の指導計画のあり方、様式、項目等も含め、今後検討することも考えていきたい。
- (4) 3観点に沿った評価・評定のあり方については、担当者から説明がありました。指導に当たっての心構え、学習改善に向けた取組について、改めて勉強になった。また、評価・評定の数値基準については、教務から出されている、数値基準があり、小学部3段階、中学部5段階の数値基準が訪問教育学級にもあてはまることを確認することができた。
今後は訪問教育学級の評価・評定の仕方について、より検討していく必要がある。

訪問教育 指導記録 (昨年度)

指導者

児童生徒氏名	札幌医大附属病院 (〇〇〇〇さん)
指導日	令和 〇年 〇月 〇日 (△)
指導場所	学習室
指導時間	10:00 ~ 12:00
健康状態	良好 ・ 普通 ・ 不良
学習目標	
学習内容	



訪問教育 指導記録 (R6.4 記入例)

児童生徒名	〇〇〇〇	指導者名	〇〇〇〇
指導日	令和6年 〇月 〇日 (△)	指導時間	10:00 ~ 12:00
指導場所	学習室	健康状態	とても良い 良い 普通 不良
治療の状況 ・様子			
教科名・時間	学習内容・活動内容	学習状況	学習・取り組みの様子
		◎	
		○	



訪問教育 指導記録 (R6.6 様式変更)

児童生徒名	〇〇〇〇	指導者名	〇〇〇〇
指導日	令和6年 〇月 〇日 (△)	指導時間	10:00 ~ 12:00
指導場所	学習室	体調状態	とても良い 良い 普通 不良
治療の状況 ・様子			
教科名・時間	学習目標・学習内容	体調変化	学習・取り組みの様子 評価
		良い 普通 悪い	a b c
		良い 普通 悪い	a b c

治療の経過と体調の変化及び配慮事項(案)

(急性骨髄性白血病・急性リンパ性白血病)

資料3

検査・治療等	発病・入院	検査	治療開始	検査	観注検査	他の治療	検査	寛解期	退院
内容		血液検査	抗がん剤投与×3～5-6 寛解導入治療点滴 造血幹細胞移植 地固め治療(抗がん剤) 維持療法(飲み薬の抗がん剤) 放射線治療	採血(白血球、好中球)	観注検査 観注検査日は全身麻酔	晴雷血移植 骨髄移植	採血(白血球、好中球)		
治療に伴う副作用(症状)			脱毛 発熱 嘔吐 倦怠感		観注検査日は全身麻酔	個室での治療 薬約100日目まで1次開放 その後2次開放 脱毛 発熱 嘔吐 倦怠感			
アセスメント	自己紹介 診断的アセスメント 児童生徒の実態把握 現状等の把握 治療内容等の確認	1 診断的アセスメント 治療開始終了時期の確認 (1) 体調確認 ・ 体調、体温 ・ 顔色 (2) 様子 ・ 話し方 ・ 機嫌(良悪) ・ 集中度 (3) 治療の確認・点滴(有無) ・ 治療の予定確認 2 形成的アセスメント(対面学習) (1) 学習態度・集中度、意欲 児童生徒の体調観察 3 総合的アセスメント (1) ワークシート、ミニテスト、教科書ワーク、プリント学習等 体調を見ながら実施	1 診断的アセスメント (事前に検査日・内容等を把握) ・ 1日遅れ及び授業日の調整	1 診断的アセスメント (プリント学習) (オンライン学習) 2 形成的アセスメント (プリント学習) 3 総合的アセスメント (1) プリント学習等 体調を見ながら実施	1 診断的アセスメント 治療開始終了時期の確認 (1) 体調確認 ・ 体調、体温 ・ 顔色 (2) 様子 ・ 話し方 ・ 機嫌(良悪) ・ 集中度 (3) 治療の確認・点滴(有無) ・ 治療の予定確認 2 形成的アセスメント(対面学習) (1) 学習態度・集中度、意欲 児童生徒の体調観察 3 総合的アセスメント (1) ワークシート、ミニテスト、教科書ワーク、プリント学習等 体調を見ながら実施	授業日の変更、振替	1 診断的アセスメント (プリント学習) (オンライン学習) 2 形成的アセスメント (プリント学習) 3 総合的アセスメント (1) プリント学習等 体調を見ながら実施	授業日の変更、振替 授業時間の短縮 授業日の変更 病欠(体調不良・治療)	
配慮事項			休憩時間の延長 授業時間の短縮 授業日の変更 病欠(体調不良・治療)		授業日の変更、振替	休憩時間の延長 授業時間の短縮 授業日の変更 病欠(体調不良・治療)			

グループ名（ 高等部A ）における実践研究

1 グループ研究テーマ

「高等部0さんの実態把握を深めるアセスメントの探求とそれを生かした教科指導方法の改善・向上」

2 研究の目的

- ・アセスメントについて理解を深め、情報を整理・分析する技量を高め、生徒の実態理解力向上を図る。
- ・アセスメント情報を、授業への配慮や手立ての改善に生かし、教科指導力の向上を目指す。
- ・アセスメント情報を、指導内容にフィードバックし、生活改善・行動改善につなげる。

3 研究仮説

- ・各種アセスメントの方法や情報を読み取り整理する様々な視点をチームで共有することで、客観性を保つ実態把握の技量が向上し、生徒の個に応じた教育実践の推進につながるのではないか。
- ・アセスメント情報をもとにした手立てや配慮を検討・実践することで、適切で的確な指導方法を取ることができ、教科指導力の向上につながるのではないか。
- ・アセスメント情報が自己理解を深めることにつながり、主体的な行動改善や学習意欲となるのではないか。

4 研究内容

- (1) あるある座談会によって、生徒の実態に対する最初の思考共有と、課題の洗い出しと改善の方向性をチームで共有する。
- (2) 各種アセスメントによる情報を集積・共有する。
- (3) 情報整理によって課題に対する分析を行い、学習に関わる手立てや配慮、教材の工夫を検討する。
- (4) 検討した手立てや配慮や工夫を実践し、改善の効果があつたかを評価する。

5 アセスメント方法

「アセスメント領域」	「対 象」	「方 法」
学習場面等で見える本人の課題	普段の様子	あるある座談会
社会性・コミュニケーション	普段の様子	S－M社会生活能力検査
行動力・実践力	知能特性・発達バランス	W I S C-IV

6 アセスメントの実際

- ・生徒の希望や目標、課題を踏まえ、各授業担当が授業等で見られる様子を座談した。
- ・課題点に対し、客観視するためにグループで検査を実施した。過去実施した検査結果も共有した。
- ・検査結果を分析し、社会性及び知能特性を把握した。
- ・社会性では、「集団参加」の「他者への関心」「集団での話し合い」が低く出ている。
- ・知能特性は、「知覚推理」が高く、「ワーキングメモリー」「処理速度」が低く出ている。

7 話し合われた指導仮説や教科指導上の手立て配慮など

「知覚推理」の高さ、「ワーキングメモリー」・「処理速度」の低さに対応する一般的な手立てや配慮から、派生する手立て等を含め次の点を共有した。

<対象生徒への手立てと配慮>

- ①具体的な言葉、キーワードで提示する。
- ②視覚的な資料を提示する視覚支援を行う。
- ③考えている過程が視覚的に残るように、思い出せるように、板書などで書き出す。
- ④リアルタイムで進める学習をする。
 - ・プリントを画面に映して書き込みながら生徒と共有する。
 - ・英単語の意味をその場でインターネット検索をして画面に提示する。
- ⑤質問は具体的で端的なものから広げていく。小さな情報を用意し積み重ね、大きな質問につなげることで「知覚推理」を生かせるようにする。
- ⑥話せるが書けないことがある。話すときに表現方法で迷う様子がある。留めておけないものもある。考える時間の確保をするとともに、書き出して思考の補助をする。
- ⑦思考が広く捉えることに長けている。具体的な言葉より概念的な大枠をまず確認した上で内に入る具体を捉えさせるとよい。
- ⑧質問や問題文を提示するときに、選択肢に「どちらでもない」「どちらも」などを作る。「正解はない」、「間違いではない」などの言葉を掛け、回答へのハードルを下げる。問い詰めるようにならないように。
- ⑨追加質問で「なんで？」と深掘り、考えさせることも必要である。
- ⑩ブラインドの意味は、同時に何かやるのが苦手だとういうことが考えられる。「考え」てから「話す」「書く」など活動を分解した方がよい。
- ⑪経験不足なことからイメージできていないものもある。自分事として捉えさせるためには、具体的な情報を与え、体験する機会をもつことで補っていく。

知能特性から、会話や話し合いの場面で「発言のつながりがわからなくなる」「感覚・イメージでわかるけれど具体的な理解に落とし込めない」などの実態が考えられ、行動へ移すこと、話し合いなどの集団活動に自信が持てない、といった今の課題の状況にあることが仮説として考えられる。このような状況に対し、上記の手立てをもって、学習指導を工夫・配慮したり、強みを生かしたりすることで、教師は教科指導の向上につながり、本人も弱みに対応できるようになるのではと考えられる。

また、アセスメントによる授業の「手立て」改善に取り組むとともに、それにあわせて対象生徒自身の課題の改善を目標に掲げ、授業の実践に取り組むこととした。

8 指導実践の記録

(1) 研究の目的・方向性

対象生徒の課題を、アセスメントの結果や普段の様子から、右の3点に整理した。

- ・行動力・実践力・実行力の弱さ
- ・自分から人との関わりを持つことの弱さ
- ・「アウトプット」の力の弱さ

これらの課題から、①「アウトプットの力」の向上を図ることを中心とした授業、②アセスメントで導いた適切な手立てを用いる授業を目指すこととして、授業実践に取り組むこととした。

対象授業としては、表現する活動が中心であり、対象生徒が自ら選択したことから主体的な取り組みも期待できる「音楽Ⅱ」の授業とした。

(2) 実践段階の対象生徒の実態

・校内研究が2年目に入り、対象生徒は高等部3年生になり、「アウトプット」の実態が向上していると研究グループのメンバーは感じていた。日々の実践から考えられることについて共有した。

●対象生徒の「アウトプット」についての座談

・言えなかったことが言えるようになってきた。なぜか？

担 任：卒業までの危機感・「今週の目標」など日常指導の効果

他メンバー：アウトプットするだけの情報がたまった・各授業の適切な手立て、配慮や工夫をした

・腹を括った・心境の変化・在校残り期間を意識した・自分事になった

・大人の関わり方の成果・モラトリアムはないことを意識した・信頼の質が高まった

(3) 研究授業①

・授業者は、対象生徒の課題と生徒に対する手立てを意識し、授業を行った。

・見学者は、動画撮影するとともに、授業内容や実践された手立てについて適切か改善の余地はあるか考えながら見学した。

<授業概要>

①セルフプロデュース「音楽クリエイターへの道」：Canva：マインドマップ作成

プロジェクトスコープ・生成AI・参考サイト紹介・参考具体例紹介

②音楽作成ソフトCubase（キューベース）：「春よ来い」：入力・確認

③ボーカロイド：キリタンAI：サイト紹介「シバっさんの部屋」：紹介・検討

④スコア：ガレージバンド：「ふるさと」：トレーニング



<セルフプロデュース>



<マインドマップ画面>



<キューベース確認画面>



<ボーカロイド紹介>



<ガレージバンド練習>

(4) 協議

- ・授業について、撮影した動画を確認・整理し、協議を行った。

<協議事項>

- ①既に実践されている手立てのチェック
- ②より良くできる改善の手立ての検討
- ③授業の工夫と成果、今後の指導について

<①②の協議結果>

- ・7<対象生徒への手立てと配慮>のポイント①～⑪はどれも十分に行っている
- ・特に、⑨の深掘り、考えさせることを大切に取組んでいた。
- ・⑪のように、実際に体験し、自分事として意識できる学習ができていた。

8(3)で感じていたように、研究メンバー各自が日常の実践で、7<対象生徒への手立てと配慮>のポイントを押さえた取組みを行っており、研究対象である「音楽Ⅱ」の授業でも十分行われていた。対象生徒の課題は改善してきている。現状の<手立て・配慮>を維持し、最終的な実践の成果・評価を行う。

<③の協議結果>

①セルフプロデュース（音楽バージョン）に取り組んだ効果・成果

- ・自分を客観視して見ることができる。
- ・考えていることがよく分かった。
- ・YouTubeのアカウントを持っていることが発覚した（わかった）
- ・MindMapを使った効果としては、「自分で確認できる」「向かっていくところが見える」「断片化されていたものがつながる」などがある
- ・今後は、やりたいことのフィードバックができるとよい

②④音楽作成ソフトやスコアの入力・トレーニングの効果・成果

- ・実際の体験や経験を通じた実感ができる
- ・必要とする知識や技能が体験を通して身に付く

③紹介したことの成果

- ・シンセサイザーVについて、紹介したものよりいいものを見つけて後日授業者に伝えてきた。
→自分事・主体性の発露

<今後の授業の方向性・工夫>

- ・より自分のやりたいことや自分の考えを深ませて、対象生徒の課題である「アウトプット」の力の改善・向上について話し合った。

①情報を与える

- ・ボーカロイドについて知ってることとか、このコードが気持ちいいとか
- ・深い情報がないと考えていけない → 王道を学ばせてから流行りを考えさせたい

②コミュニティ・つながりを作る取組み

- ・ボーカロイド仲間、音楽仲間、同じ地域で活動する人など、リアル/SNSなどでのつながり

③卒業制作・オリジナル制作

ここまでの研究授業①の成果と課題をもとに、校内で中間発表を行った。その講評で、「キャリア教育」の視点を持ち、キャリア発達を促す実践だと評価された。アセスメントにより、授業をより良く実践できることに合わせ、アセスメントにより、生徒の課題改善と能力向上、またキャリア発達を促す実践につながるように、以降継続実践し、研究授業②を行った。

(5) 研究授業②

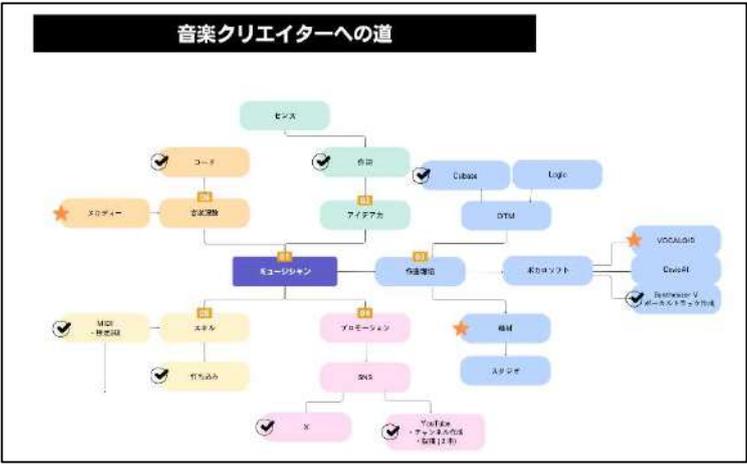
<授業概要>
 ○目標：考えを深めさせるために（深掘りして本人の考えを広げる手伝い）情報を与える
 ○内容 ①MIDI 検定の結果 振り返り
 ②セルフプロデュース「音楽クリエイターへの道」：マインドマップ振り返り
 ③センスを高めるためにどうしたらよいか →先生たちの考えを聞く



<セルフプロデュース振り返り>



<先生たちの語りを聞く>



<プロデュースのマインドマップ画面>

(6) 研究授業②の成果

- ①MIDI 検定は事前に学習、検定を受け、結果が出ていた。結果は不合格ではあったが、振り返りを行うことで知識の不十分だった点が確認された。次回の検定は卒業後になるが、継続して受ければ合格圏内だということに見通しをもたせることができた。次回は合格できると期待できる。
- ②セルフプロデュース「音楽クリエイターへの道」のマインドマップを振り返った。今年度取り組めたことや準備できたことにチェックを入れて確認することで、YouTube に作曲した曲を上げたことやシンセサイザーVで「春よ来い」にボーカロイドの歌声を入れたこと、作詩（作詞）に取り組んだことなど、生徒自身の成果が視覚的に確認できた。また、卒業後にどのようなことから取り組みばよいか、生徒自身にチェックさせ、見通しをもたせることも出来た。
- ③「センスを高めるために」どうしたらよいか、どのようなことがつながっていくか、見学していた先生たちからの意見を聞いた。他者の考えを複数聞くことによる情報取得で、生徒自身の考えの深まりや広がりにつながった。今後どのように生徒自身が実践していくか期待される。

(7) 研究授業を含む日々の授業実践の成果

- ①自分のしたいことを実践するための手立てを明確にすることができた。音楽クリエイターとしての道筋をもたせることができた。
- ②実際に実行する経験を積ませることができた。実行するための考えを深めさせることができた。
- ③発信するための手立て、仲間や社会とつながる手立てを知り、実行できた。
- ④自分の考えをもち、他の授業や行事等でも、自信を持った発言ができる、発言する場面が増えた。

9 研究の成果・課題

(1) アセスメントの成果

- ・対象生徒の日頃気になる点について、まず普段感じていたことや様子を共有する「座談会」を行ったことは、生徒の課題や実態を把握することに役立つ。個人が主観的に思うことも、複数人が情報を共有することで、互いに共感する情報は客観的な実態把握として有効であった。
- ・S-M社会生活能力検査、WISCの結果を分析したものは、上記の座談会で確認された対象生徒の実態の裏付けとして納得することができ、客観的なアセスメントとして有効であった。
- ・また、検査の分析結果における課題に対応する一般化されている手立て、配慮や工夫は、教師全体で行う手立てとして、説得力があり確実性のある方法であった。授業や日常の手立てや配慮を統一して行うことで、下記(2)のように、生徒の課題改善や理解力思考力の向上にもつながり、効果的であった。

(2) 生徒の課題改善・能力向上

- ・今回の対象生徒の課題は、
 - ①行動力・実践力・実行力の弱さ
 - ②自分から人との関わりを持つことの弱さ
 - ③「アウトプット」の力の弱さの3点だった。2年間の指導実践の結果、

- ①自ら調べてきたり計画的に宿題などを行ったりする主体性や実行力の向上
- ②集団活動で話し合いをまとめたり、SNSで発信したりする社会性の向上
- ③作詩や作曲、自分の意見や考えを他者の中で発信しようとする表現力の向上

が見られた。

- ・この結果は、上記(1)のように、アセスメントによる実態把握と客観的で適切な指導の手立て、配慮の工夫をもち、その上で個に応じた授業の工夫をすることで、課題の改善が図れたといえるだろう。
- ・もちろん、この成果は研究対象の授業のみならず、担任を中心とした日々の各教師の指導があったからということも押さえておく必要がある。

(3) キャリア発達を促す指導実践

- ・今回の対象生徒には、将来「音楽クリエイター」になりたいという希望があった。その生徒の希望と合致し、自ら選択した「音楽Ⅱ」の授業を研究対象とした。生徒の学びたい希望に合わせて必要な知識技能を指導し、叶えるための課題とその道筋を考えられる手立てを用いることで、キャリア発達を促す指導実践ともなった。
- ・キャリア発達とは、「社会の中で自分の役割を果たしながら、自分らしい生き方を実現していく過程」のことをいう。そのポイントとして、「経験やスキルを蓄積した先の自己実現の追求」「将来の姿や目標に向かった行動の積み重ね」「人格と環境との相互作用」「生涯にわたる意思決定」などがある。社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育てることを通して、キャリア発達を促す教育が「キャリア教育」であり、①人間関係形成・社会形成能力、②自己理解・自己管理能力、③課題対応能力、④キャリアプランニング能力という4つの主要な能力を育む必要がある。(文部科学省HP参照)
- ・キャリア教育のポイントを踏まえ、今回行ってきた研究テーマ「子どもたちの教科指導における資質・能力の育成につながるアセスメントの探究」を振り返ると、発達特性の把握や指導の手立てを知るアセスメントも大切だが、その前提として、生徒の考える「社会の中での自分の役割や自分らしい生き方」や「実現させたい将来の夢や目標」を把握するアセスメント、あるいはそれを早い段階でもたせられる指導があるとよいのではないだろうか。特に高等部としては、どの教科や各種指導においても「将来」を意識して指導に当たる必要がある。
- ・三角山分校の「志」の目指す先にも「なりたい自分」がある。そこを目指す教育活動とするには、

- ①生徒の将来の夢や目標の把握するアセスメントやもつことができるように促すこと
- ②夢を実現する上で「課題」となる生徒の実態をとらえるアセスメントをすること
- ③検査などのアセスメントを行い、生徒の発達特性を把握して客観的な指導の手立てを得ること
- ④夢や目標を目指し、生徒の「課題」を改善・克服し、キャリア発達を促し主要な能力を育むことを目的とした指導を、学級の時間だけではなく教科指導でも考え行うこと
- ⑤「課題」や発達特性を踏まえた指導の手立てを実践すること

以上のことを学校の教育活動全体で実践していけたらよいと思う。

10 まとめ

キャリア発達を促す授業実践のためにも、各種のアセスメントを行い、実態把握することは大切であり、教科指導を行う上でも必要なものだった。適切な指導の手立てと授業の配慮や工夫を行うことで、生徒の資質・能力の確実な育成につながり、夢を叶える可能性も高まった。今回の研究に協力してくれた対象生徒の成長に期待・応援し、今後も卒業後支援の形で成果を見ていきたい。

グループ名（ 高等部B ）における実践研究

1 グループ研究テーマ

アセスメントによるBさんの思考の幅を広げる教科指導上の手立てや配慮の整理・充実

2 研究の目的

アセスメントの在り方を検証し、情報を分析することでBさんの見方とらえ方を共有する。

アセスメントに基づきBさんへの教科指導力向上に向けた手立てや配慮の整理・充実を図る。

3 研究仮説

日常実践の交流からアセスメントの在り方についてグループで共有しアセスメントの情報を分析することで教科指導上の手立てや配慮の信頼性、妥当性が高まり教科指導力の向上につながるのではないかと。

4 研究内容

(1) 授業実践記録の分析から授業態度や学習のつまずきを理解し、共有を図る。

(2) WISC-IV心理検査の分析・共有から指導方法の手がかりを見つける。

(3) 各教科の指導内容表からチェックリストを作成し、基礎的学力の共通理解を図る。

(4) 各アセスメント情報の収集、情報・分析を総合的に捉え、教科指導上の手立てや配慮の整理充実を図る。

5 取り組んだアセスメント方法

「アセスメント領域」	「対 象」	「方 法」
学習のつまずき	授業態度	各教科授業実態シート、各教科特記事項を記入
学力・基礎的学力	授業中の理解度	各教科の指導内容評価表からチェックリスト作成・実施、分析共有
WISC-IV	認知能力のバランス	検査実施、分析共有

6 一年次のアセスメントの実際

(1) 各教科授業実践記録の交流と分析から見えた生徒の実態

- ・短期記憶低い。
- ・段取りを追って学習を進めることはできるが、答えは一つでやり方が複数ある場合は混乱しやすい。
- ・選択肢が増えると混乱。
- ・試行錯誤ができない。
- ・直感で一つ選びがち。(失敗したくないのか。)
- ・難しい学習内容の時、下学年の内容まで振り返る必要があり、できない自分と向き合わなければならないのが辛いのではないかと(プライド)
- ・見本を示してもその通りにやらないのは、真似はだめだと思い込んでいるかもしれない。オリジナリティを重要視しているのではないかと。

- ・メリットを匂わせる、子ども扱いしないなど、納得させポイントを模索すると良いのではないかな。
- ・基本しゃべりたいので、集団の中でしゃべる時間を保障することで規律を保つ。
- ・やる気はあるが覚えておくのは苦手、視覚的な補助教材も有効。
- ・失敗→否定されず→クールダウン→自分でより良い行動をすることができる。
- ・受け入れつつ（意欲を損なわない様に）本人の気づきを促す。（どこまで受け入れるか、完成度を上げるにはどうすればよいか、などの課題がある。）
- ・時間の中で粘っていい物をつくれるという目標を立て本人に確認するとよい。

（2）WISC—IVの実施と分析

2月実施、分析については次年度に引き継げるようにしておく。

（3）各教科の指導内容表から見えた生徒の実態

- 「国語」
- ・書くこと雑に見えることもあるが、本人は丁寧に描いている。
 - ・少しずつ読書に親しむ様子が見られるようになっていった。
 - ・大体が伝わるように話すなど、伝えることができるようになっている。
 - ・体験したことを伝えまとめることができるようになっている。
 - ・文章理解では直感で分からないものは深掘りしない傾向がある。
- 「社会」
- ・得意教科
 - ・簡単すぎは満足できない。過去に学習したものとつながりがもてるような新たな知識が加わると意欲を示す。
 - ・歴史資料の読み取りは、分かりやすいように作ると理解できる様子。
 - ・北海道の地図は行ったことのある市町村の場所はわかるが、それ以外のものについてはあいまいな部分がある。
- 「数学」
- ・わからない時トイレに行くことは減り、わからないと言えるようになってきている。
 - ・計算問題などその時間はできるが、次に忘れるということがる。
 - ・図形の作図はアプリを使うのでコンパスや三角定規は使用しない。
 - ・昨年度より戻って学習することもある。先に進み、戻って学習することを繰り返したり、他の分野の学習をしたり内容を工夫している。

7 各教科のアセスメントの分析による指導仮説や教科指導上の手立て配慮など

- 「情報」
- ・自身の言動を承認しつつ、より良い方法へ行動を移行させるための指導
 - ・指導した後は、本人を信頼して距離をおくことで、自ら課題解決することができる。
- 「社会」
- ・たとえ間違えた発言をしても、正答している部分を取り上げることで意欲を損なわずに学習を進めることができる
- 「職業・家庭」
- ・アセスメントによる適切な例示や選択肢を与えることで、本人の興味関心を刺激し、思考の幅を広げ見通し思っって学習に取り組ませることができるのではないかな。

「保健体育」

- ・話し合い時にはあらかじめ「今日のリーダー」を指名して進めることで間を置いて意見を伝えられることができる。

「国語」 ・(Bさんの思考の幅を広げられるような教科学習を行うためには) 実態把握に基づき適切な課題設定を行い、生徒の学習意欲を喚起することが有効である。

「数学」 ・学習意欲を高めるために必要な「わかる学習」のための教材の工夫や環境を改善することで学ぼうとする気持ちを持続できるのではないかな。

「美術」 ・試行錯誤ができるチャンス 時間的な余裕、精神的な余裕、条件的な余裕(教材など) 自分で気付くチャンス自分の成功や失敗、友達の成功や失敗
→2点ができる限り体験できれば、制作の場面で新しいものにチャレンジして「僕はこれができる」のプライドが広がる・深まるのではないかな。

各自で授業実践を進めていく中、アセスメントの分析を生かし、各教科で指導仮説を立てることができた。今年度の指導仮説を基に次年度各教科へ引き継ぎ、実践を積み上げていく。

8 一年次の研究の成果・課題

今年度は各教科における授業実践記録と指導内容表による実態把握を中心にアセスメントを行った。その交流と分析から、教科毎にそれぞれの指導上の手立てや配慮事項を考え、いくつかの流動的な指導仮説を立て実践を積み上げてきた。最後のグループ協議では、指導仮説を整理し有効性を確認した。また、その指導仮説を共有することで、共通する手立てや配慮事項も見えてきた。

共有された指導仮説における適切な課題設定として、本人にとって少し難しい課題、本人が創意工夫する余地のある課題などがあげられた。

また、課題解決の為のルール作りとその理解を促すことの必要性が明らかになってきた。また、指導には、本人がその内容を受け入れる時間を確保する必要や意欲や意見を承認することの有効性なども各教科の指導仮説に生かされている。次年度以降は、今年度各教科で立てた指導仮説を引き継ぎ、さらに実践を積み上げていく。また、2月に実施済みのWISK-IVのアセスメントの分析を取り入れ、更に教科指導上の手立てや配慮の整理・充実に役立て実践を積み上げていく。その実践の経過を共有し指導仮説を検証し、グループの研究テーマ「アセスメントによる Bさんの思考の幅を広げる教科指導上の手立てや配慮の整理・充実」に迫っていきたい。

<その他次年度への引き継ぎ事項>

グループ協議の記録、授業実態シート、指導内容表からの実態把握、WISK-IVの実施・分析結果

9 2年次のアセスメントの実際と指導実践の記録

(1) 年度当初の生徒の実態

昨年度と比較すると、うまくいかない状況に対して、振り返りの時間を設定することにより、「あのときは、こうだった」などと、自分の言動を振り返ることができるようになってきた。生徒同士の話し合いにより自分の課題に気付ける場面があった。しかし、課題にうまく取り組めなかったり、やるべき事をやっていないことでひどく落ち込んだりする姿もみられる。褒められるとモチベーションがアップ

する。また、丁寧に声をかけ、本人が自分で考えて取り組ませる工夫を講じることによって、自分から気付いて切り替えようとすることができる。

(2) 授業実践の交流

昨年度各教科で立てた指導の仮説に基づいた授業実践の記録をさらに積み上げた。その分析と共有を図るため授業の動画を元に指導仮説の検証を行うことにした。各教科で授業参観週間に授業を見合い、それぞれの指導仮説に焦点を絞った動画が残せるよう日程と撮影者を調整した。Bさんにとっては、授業中に動画を撮ることは平常心でいられないことが考えられるため、予め理由を含め例えば「教育実習生の研究のため」など撮影計画をしっかりと伝えておく必要があることが確認された。

各教科で撮影された動画を元に具体的な手立てを確認し、整理し共通の手立てや配慮事項を確認することができた。

<指導仮説を共有して、見えてきた共通の手立てや配慮事項>

適切な課題設定や提示方法	課題解決の為に事前にルールを確認するまた、そのルールの理解を促すための工夫
①「わかる、できる」と思える課題設定やその提示方法 ②本人にとって少し難しい課題設定 ③本人が創意工夫する余地のある課題やその提示方法	①適切な解決方法を選択肢で示す（自分で選ぶことが行動につながる） ②話し合いを通して周りの人の意見を聞く（納得しやすい） ③指導内容を受け入れるための時間の確保 ④本人の意欲や意見を承認する

(3) WISK—IVでの分析結果から話し合われた指導仮説や教科指導上の手立て配慮や工夫

WISK—IV合成得点プロフィールから見る強さと弱さを再確認した。弱さの2つのプロフィールからは、これまでのアセスメントから見えてきた生徒の課題が見えた。また各教科実践してきた指導仮説による配慮と工夫でも強さの5つのプロフィールと一致する部分が見い出され、これまでの実践に強さを活かす指導と弱さを補う指導の視点を加えて整理しながら各教科で実践することにした。また、これまで記録してきた各教科の授業実践記録に加えてどの力を活かしたか、どの力を補う指導を行ったかがわかるように各教科で実践を記録した。それにより成果を具体的なイメージを持ってグループ間で共有することができた。

<WISK—IV合成得点プロフィール>

強さ（活かしたい力）	弱さ（補いたい力）
①言葉の意味や性質を考える力 ②言葉でイメージする力 ③言語による知識習得 ④目で見た情報を素早く識別する力 ⑤具体物を操作してイメージを高める力	①目で見た情報を参考にじっくり考えたり、新しい情報に基づいて課題を処理したりする力 ②聞いた情報を一時的にとどめて活用する力

<各教科における授業実践の記録と具体的な指導の配慮や工夫>※抜粋

「職業・家庭」※強さ④目で見えた情報を素早く識別する力を活かした指導

課題	配慮や工夫	成果
PC 操作でのポスター製作途中に改善点を指摘しても受け入れられないことがあった。	製作前に、過去の作品を見ながら、改善点に関する意見交流を行った。	改善の余地が残されていたことを素直に受け入れる発言があった。

「社会」※弱さの①目で見えた情報を参考にじっくり考えたり、新しい情報に基づいて課題を処理する力

課題	配慮や工夫	成果
アフリカの学習で、鉱山資源に関する資料の読み取りを行った。分からない様子が見られたため、個別に説明をしたが、「分からない」と伝えることができず、分からないままにやる気を消失させてしまった。	これまでの学習の中で、よくできていた部分を伝え、もう一度、教師と一緒に資料の読み取りを行った。南アフリカでよく採れるもの2つに絞り、そこだけを見るようにすると落ち着いて、どこで何が多く産出されているかを理解し、発表することができた。	焦点を絞ることで、気が散ることなく集中することができた。

「情報」※(⑤具体物を操作してイメージを高める力)指導

課題	配慮や工夫	成果
口頭で土俵から落下しない長さを提示したが、提案を受け入れられず、進む長さを短く修正することができなかった。	具体物(定規)を使って実際に長さを確認する場面を設定した。	まず話を聞くこと定規などで具体的な距離を示すところで助言を受けながら、修正することができた。

「体育」※弱さ①目で見えた情報や新しい情報に基づいて課題を処理する指導

課題	配慮や工夫	成果
・ボッチャの試合で戦績が低かった相手に負けて落ち込み、周りを見る余裕をなくしてしまった。	・試合を行う際のルール決を生徒同士で行った。 ・学習カードを用いて試合の振り返りを行った。	・時間を置いて学習を振り返り「次は投げるパワーを考えてやる」とカードに記入することができていた。

「美術」※強さ⑤具体物を操作してイメージを高める力を活かし、弱さ①目で見えた情報を参考にじっくり考えたり、新しい情報に基づいて課題を処理したりする力を補う指導

課題	配慮や工夫	成果
・コマ撮りアニメーションの絵コンテの内容の部分が「できない」、「書けない」と言い、意欲が低下。	・前時2コマ分は、①本人が話したことを教師が書く。②時間をおいて考えてもらう。③対応する教師を換えて話す。④別の活動を進める。を助言・提示するが、受け入れられなかった。	・写真を撮り、見て確認することで、自分で進め方に気づき、意欲をもって取り組むことができた。

	・教師がアシストすることを伝え、 写真を撮り、見ながら動きの確認 をする。複数名での賞賛。	
--	---	--

「理科」※強さ⑤具体物を操作してイメージを高める力、弱さ①目で見た情報を参考にじっくり考えたり、新しい情報に基づいて課題を処理したりする力

課題	配慮や工夫	成果
手作りマイクの制作場面において、はやる気持ちを抑えきれず、説明を聞かずに工程を進める場面があった。	炭素粉末の量、電極のサイズ、電極と粉末とが接する圧力など、マイクの機能を左右する要因について意見交換した。	自分の作業に慎重さが足りなかったことを省みて、粉末の量や圧力の調整を粘り強く行ったり、正しいと思って行った加工が誤りであったことを言葉で発したりすることができた。

各教科での実践記録の交流から、弱さ①「目で見た情報をじっくり考えたり、新しい情報に基づいて課題を処理したりする力」を補うための具体的な配慮や工夫が多く挙げられた。それらは「話し合いを通して周りの人の意見を聞くと納得しやすい」、「指導内容を受け入れるための時間を確保する」など(2)のこれまでの指導仮説の実践から見えた共通の手立てや配慮事項でまとめたものが生かされたものであった。また、各教科の中で意欲の低下や教師の指導助言が受け入れられないなどの課題が見えた時に、強さ④「目で見た情報を素早く識別する力」⑤「具体物を操作してイメージを高める力」を活かした具体的な配慮や工夫が取り上げられた。

(4) 指導内容表の再確認について

1年次の国語、社会、数学記載済みの指導内容表と新たにチェックされた理科の指導内容表を共有し、指導に活かすことを確認した。

5 成果と課題

一年次のアセスメントの実際においては、各教科の授業実践の記録を分析し、指導内容表からの実態把握を加えいくつかの指導仮説を立てた。

二年次は各教科での指導仮説を基に授業実践を積み上げ、授業中の配慮や工夫の実際を動画撮影しグループ内で共有することができた。その指導の配慮や工夫を分析して指導方法の有効性を確認することができた。さらに WISK-IVの合成得点プロフィールから活かしたい力と補いたい力の視点を加えることでより、信頼性・妥当性の高いものとして確認することができた。

これまでの2カ年計の研究の中で生徒の変容として次の内容が挙げられる。

- ・事前にロールプレイを通して学習し、上手くいったときはすぐに褒める等を繰り返すことで話し合いの場面で人の話を聞くことができるようになった。
- ・各授業の中で共通の認識を持って指導に当たったことで、本人の安心感が高まり失敗したことを伝えられるようになり、次はどうしたらよいか考えられるようになった。
- ・悔しい気持ちを言葉で表現することができる様になり、様々な学習場面で挑戦と失敗を繰り返し

ながら成長が見られるようになってきた。

このことから、「グループ内でアセスメントにより共通理解し一貫性を持って指導にあたることで教科指導上の手立てや整理・充実を図ることが出来き、その妥当性・信頼性の検証により B さんの思考の幅を広げる教科書指導力の向上に繋げることが出来た」と考える。

課題として、やりたいことがあるとき、情報過多になり、何かから手をつけていいかわからない状況が見られる様子がある。課題解決の道筋をたてスモールステップで解決していくことが必要と思われる。一年後の卒業を見越し、将来の目標や、生き方を自分で考え計画しひとつずつ実行していくことができるよう今後も、継続して一貫性のある指導を行うことでさらに広がりつつある思考を深めていくことができると考える。

グループ名（小中学部）における実践研究

1 グループ研究テーマ

国語科：絵本作りを通して、想像力を育み、ストーリーを創り出す力を育てる。

～アセスメントの活用と自己理解・自己表現につながる国語力の獲得～

2 研究の目的

- (1) これまでの学習到達度についての明確な資料がないため、アセスメントにより即時性と客観性のある実態把握を行う。
- (2) 国語科の題材指導を通して、教科の目標と自立活動との関わりについて考える（自己理解と自己表現に必要な語彙や表現・効果的なインプットの方法・学習意欲を維持するための工夫・知識の獲得と定着を図るための工夫）。
- (3) 研究の成果を今後の目標設定や学習課題の選定に活用する。

3 研究仮説

- (1) 「発達検査によるアセスメント」「教師の観察と記録による情報共有」を行い、より根拠のある目標設定、学習内容や手立ての選択と次時の目標設定に生かすことができるのではないかと。
- (2) 「自分の気持ちを正しく認識する」「適切な表現方法で自分の感情を伝える」ための語彙や表現方法を獲得し、日常生活における肯定的な態度、および他の教科での学習効果の拡大につなげることができるのではないかと。

4 研究内容

- (1) アセスメント（検査の実施と分析／行動、学習観察／授業分析）
- (2) 国語科：絵本作り 題材指導計画の作成と授業実践
- (3) アセスメントを活用した、効果的なインプットの方法や指導の手立ての検討
- (4) 自己理解・自己表現に必要な語彙や表現の収集、選定
- (5) 単元の振り返りと生徒の変容の共有

5 アセスメント方法

- (1) 対象生徒の認知及び特性、学習上の困難さの把握について
- (2) 対象及び方法

ア 心理アセスメントの実施

生活能力・適応行動に関するアセスメント（S-M 社会生活能力検査 第3版）

6 領域（身辺自立、移動、作業、コミュニケーション、集団参加、自己統制）

知能・認知に関するアセスメント（WISC-IV）

4 領域（言語理解、知覚推理、ワーキングメモリー、処理速度）

ことばに関するアセスメント（PVT-R）

語彙の理解力、発達度、語彙年齢

イ 授業記録（指導記録、ビデオ）と分析

6 アセスメントの実際

(1) 中学部 在籍生徒1名について

本年度初め、本人の実態について、前籍校からの情報及び昨年度のレスパイト入院（令和5年10月、11月、12月、計3回）時の記録を参考に、担任から情報共有が行われた。

ア 生徒の実態について（前籍校からの情報）※資料より抜粋

人と話すことを好む、明るく優しい性格。人と関わって良い関係を築きたいという気持ちをもっているが、学習の遅れや生活経験の不足により適切な関わり方を学習することができていない様子。教師に対して、乱暴な言葉をぶつけてしまうことがある。様々なことに興味をもち、教師と一緒に活動することを好むが、活動に集中していただける時間が短い。活動に飽きてきたときや課題が難しく取り組みたくないと感じたときなどに、机上のプリントなどを手で払って落としたり、自分の好きな活動（タブレット端末でゲームをする、玩具で遊ぶなど）をしたいと訴えたりする。



これらの情報をもとに、担任としての思いや当面の指導方針（目標と手立て）について提案があった。

イ 学級担任の思い

本校の日課に合わせて落ち着いて学習に取り組み、教師や友達に対する適切な関わり方を少しずつ身に付けるとともに、学校生活の中に楽しみを見いだすことができるような支援の仕方を考えていきたい。

ウ 目標と手立て

(ア) 活動内容や時間に対する見通しをもち、日課に合わせて気持ちを切り替えて学習に臨めるようになる。

→ 活動内容を提示するときは、視覚情報を取り入れ、言語指示は短めにし、活動の区切りをわかりやすく伝える。アナログ時計、タイムタイマーを使用する。好きなことに取り組める時間も保障する。

(イ) 提示された学習内容に取り組むこと、集中して取り組むことのできる時間を少しずつ増やす。

→ 教師が見本を見せる。目先を変えて興味を引くことができるようにいくつか活動内容を用意する。決められた時間までは、選択肢の中のいずれかの学習に取り組む。取り組みの様子を賞賛する。授業の流れをどの教科も同じにして提示し、見通しをもちやすくする。授業の様子について記録し、どんな学習活動の際の、どんな関わりに対して、良い反応があったのか等をつかんでいくことができるようにする。

(ウ) 人の嫌がるような言葉を言うてしまう回数を減らすこと。

→ どのような言葉が相手を不快にさせるのか、また代わりにどのような言葉を使えばよいのかを学習する。適切な言葉を使って、相手と仲良く楽しい時間を過ごすことができたという経験を増やす。様々な活動を通して、いろいろな言葉を知り、使用することがで

きるようにする。

- (エ) 筋力の低下に対応するため、書字だけでなく、パソコンなどのツールを使用して、自分の意思を伝える力を育てる。(新しい車椅子に慣れて、安全に操作できるようにすること)
→ 自立活動や学級活動、体育などの時間を通して、本人が楽しみながら身に付けていくことができるように学習活動を行っていく。

エ 自立活動の時間の指導目標



次の活動内容や時間に対する見通しをもつことができるような環境づくりに努めることで、気持ちの切り替えを短時間で行い、次の活動に移ることができるようにする。
(心理的な安定)

図1 自立活動実態把握票より抜粋

(2) フォーマルアセスメントの実施

本年度の研究対象者を決定した後、対象生徒の認知及び特性の把握の一助として、コーディネーターに心理アセスメントを依頼した。

検査終了後、アセスメントから見えた実態と支援の方向性について、学部研修を行った。

ア 対象生徒の良さ、強みと学習上の困難さ、弱み

表1

対象生徒の良さ、強み	学習上の困難さ、弱み
書くことよりも話す方が得意な傾向にある。 絵を見て判断する力が高い。 形に残る活動を好む。 想像を膨らませながら話す傾向がある。 難しい活動でも、試してみて、できると満たされている。 承認欲求が高い。 好きな活動は自信をもって行うことができる。	失敗を気にする。 イライラする様子が見られる。 興味がうつりかわりやすい。 集中できる時間が限られている。長いスパンでの学習は厳しい。 新しい情報に基づいて課題を処理すること、聞いた情報を一時的にとどめたり活用したりすることに困難さがある。

イ 支援の方向性

学習に不要な刺激は、できる限り排除する。

視覚情報はシンプルにし、必要に応じて言葉での説明を追加する。

指示や説明は短く、簡潔に、繰り返して確認する。

手本を見せたり、見本を事前に示したりする。

わかりやすい活動の区切り（言葉がけ）をする。

学習した内容や過去の経験との関連をあらかじめ伝えておく。

説明した内容を簡単な言葉で質問し、本人がどの程度理解できているのか確認する。

コンパクトな活動をいくつか組み合わせる。



これらの実態把握を経て、さらに生徒理解が進むとともに、現在各教科等で行っている手立ての根拠となりえることが確認された。

7 話し合われた指導仮説や教科指導上の手立て配慮など

グループ協議第1回目（5月28日）

在籍（児童）生徒について現在の学習状況や各教科等で行っている手立てを共有した。今回の協議を通して、どのようにして興味関心をもたせているのか、題材設定の仕方、学習意欲を維持するための方法、飽和したときの対処法などが交流できた。これらは、在籍生徒の良さや強み、学習上見られる困難さとして整理することができた。

グループ協議第2・3回目（6月3日・6月25日）

対象生徒の選出、生徒理解のために深めたい事項、校内研究を進める上での学部内での役割、授業研究は国語科で行うことを協議した。また、コーディネーターに依頼して実施した、WISC-IV、PVT-Rの検査を経てアセスメントから見えた生徒の実態と支援の方向性について、臨時で学部研修を行った〔※6（2）に記載〕。研修後には、さらに、対象生徒と関わることが多い学部職員でその他の方法で実態把握を実施してはどうかという意見もあり、「生活能力・適応行動に関するアセスメント」（S-M社会生活能力検査第3版）を今後行う方向性となった。

グループ協議第4回目（7月19日）

研究推進計画の確認、S-M社会生活能力検査を一部実施した。残った検査は、担当者を2名決めて今後実施することとした。

グループ協議第5回目（8月23日）

国語科の授業づくりを開始した。対象生徒は、これまでに、学校図書館、学校近隣の図書館から、図鑑や紙芝居を借りて教師と一緒に読んだり、小学部の児童に読み聞かせを行ったりする学習を行っていた。

そこで、「絵本（オリジナルのストーリー）作り」を行うことで、様々な登場人物に自分の思いをのせながら展開する楽しさを味わうことができるのではないかと考えた。また登場人物の心情や場面に応じた語彙や表現方法の獲得を図れるのではないかと考えた。さらに、自ら考えた「絵本」を他者（小学部の児童や小・中学部の教職員など）に発表するという学習展開にすると、学習意欲を喚起、維持しながら題材計画の終わりまで学習を進めることができるとともに、達成感や自己有用感を育むことにつながるのではないかと話し合われた。国語科における実態把握及び各指導目標を示す（図2）。

国語科における実態

- 本を読むことが好きで、独創力がある、絵本に自分のストーリーをのせ話することができる。
- 平仮名は読めるが、漢字は小学低学年段階相当。カタカナは概ね読むことができる。
- 書く作業は、疲れてしまう。

国語科年間指導目標

- 日常生活に必要な国語についての知識や技能を身に付け、それらを活用して自分の思いを表現しようとする態度を養う。
- 簡単な語句や文章などを読み、感じたことや考えたことを伝えることができる。

国語科の個別の指導目標

- 語彙力を増やし、場に応じたコミュニケーションをすることができる。

図2 国語科における実態と各指導目標

グループ協議第6回目（9月17日）

授業の進捗状況について共有された。絵本作りのテーマは「助け合い」「宇宙」を舞台にしたストーリー展開、登場人物（キャラクター）は「おばけたち」など、授業者が生徒の思いを引き出しながら授業を進めている様子が動画等で伝えられた。

また、S-M 社会生活能力検査の結果が共有された。生徒と関わるなかで日頃から課題と思われると感じていた部分（自己統制の弱さ）と重なる結果であったということが、研究チームより伝えられた。

今後の授業を進める上での工夫としては、「今日の課題」を明確にすること、学習の経過がわかるように、目に見える形で記録を提示すること、生徒の学習経験や生活経験を補うことができるよう、複数の登場人物を設定すること、そしてその登場人物間の関係性も考えさせられたらよいのではないかなど話し合われた。台詞を考える上で、場に即した言葉ではない場合、その言葉の裏側にある思いを引き出す、あるいは教師の方から、何という言葉を使ったら相手は嬉しいだろうか、と投げかける支援も有効ではないかという意見も出された。

グループ協議第7回目（10月11日）

登場人物（キャラクター）をペープサートで表し、操作しながら楽しく「絵本作り」を行っていること、教師との対話の中で、イメージを膨らませながら場面展開を考えていること、生徒の考えを教師の方で視覚化しながら整理していることなど学習の様子や手立てが共有された。また、登場人物（キャラクター）のプロフィールを作り、教室内に掲示し、適時振り返りながら学習を進めているということも報告された。

次の段階として、登場人物の気持ちやその理由を目に見える形（ワークシート）に表してみてもどうかという意見も出されていたが、現在の生徒の実態にはそぐわないのではないかと、難しいのではないかと意見もあった。現在行っている手立ては今後も継続していくことが方向性として確認された。

グループ協議第8回目（10月29日）

本単元の授業記録、題材計画が共有された。登場人物（キャラクター）の表情、動作、声のトーン

など、絵本のイラストに反映したり発表（朗読）に向けて試行錯誤したりしている様子が伝えられた。また、完成した「絵本」を学校行事の「学校祭」で発表することを受けて、より多くの方に、自分の成果を伝えられるということで本人の学習意欲を喚起するものとなったということが報告された。発表場面（学校祭）までの取り組みの様子や当日の発表の様子から、次のような感想が学部職員から出されていた。

- ・ 様々な登場人物や台詞を考えて、オリジナルの絵本を完成させられたのは、すごいと思った。
- ・ 教師とのやりとりのなかで話が膨らみ、脱線しそうになることもあったが、予測できた行動であったため、指導者が本人の思いをくみ取りながらスムーズに活動に戻す様子がよかった。
- ・ うれしそうに、自信をもって発表（朗読）する様子が見られた。
- ・ 保護者をはじめ多くの方に賞賛され、本人は大変うれしそうにしていた。



グループ協議第9回目（1月14日）

本題材の振り返りと本年度のグループ研究のまとめ（各自の授業等を通して感じたこと、仮説検証）を行った[※9に記載]。授業者からは、題材を振り返りながら、対象生徒の変容について次のような内容で共有された。

- ・ 自分が知っている実在する話に内容を重ねたり、キャラクターへの憧れから台詞や態度をまねたりするなどの様子が見られたが、教師との対話、ペープサートの操作などを通すことで、設定したテーマに合わせて想像力を膨らませながら、絵本作りを進めることができた。
- ・ 発表場面では、教職員や保護者など、周囲の人から賞賛を受け、表情が和らいでいた。
- ・ 題材の終わりには、繰り返しわかりやすい言葉で、声の大きさや読み方などよかったところやがんばっていたところを伝えた。「うん、うん」と頷いたり、目を輝かせたりする姿が見受けられた。

8 指導実践の記録（題材計画より抜粋）

<p>(1) 題材名 絵本作り（実施時期、回数 8月～10月、計23回）</p> <p>(2) 題材目標</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 新しい語彙や表現を習得し、絵本の中で使用することができる。（知識及び技能） ○ 想像力を膨らませ、ストーリーの展開を考えることができる。（思考力・判断力・表現力等） ○ 登場人物の気持ちになって、次の行動や台詞を考えることができる。（思考力・判断力・表現力等） ○ 発表に向けて、意欲的に絵本の創造に取り組むことができる。（学びに向かう力、人間性等） <p>(3) 学習の流れ</p> <p>【オリエンテーション】→【キャラクターの設定】→【ストーリー展開】→【発表】→【振り返り】</p> <p>(4) 指導支援の工夫</p> <ol style="list-style-type: none"> ① 大まかな学習の流れを理解できるよう、オリエンテーションを行う。 ② テーマ、キャラクター、舞台などを設定し、ストーリーを展開する。 ③ 文章、台詞は、生徒の発言を聴き取り、教師が記録する。 ④ ストーリーは、生徒と対話しながら作成する。6～8枚程度の絵コンテにまとめる。 ⑤ 操作性のある教具（ペープサート）を用意する。 ⑥ 次に何が起こるのか、誰が何をするのか、この場面で何と言ったか、どう感じたかなどを発問し、生徒の想像を膨らませ、考えを引き出す。 ⑦ 「自分の気持ちを正しく認識する」「適切な表現方法で自分の感情を伝える」ための語彙や表現方法を獲得できるように、身に付けさせたい語句や表現を選定する。 ⑧ 発表の機会を設ける。
--

図3 題材計画より抜粋

授業の実際 [※板書、映像記録より記載]

①大まかな学習の流れを理解できるよう、オリエンテーションを行う。

絵本 作り 予定 (全 10 回)

①8月21日(水) テーマを考える(ざっくり)
 ②8月23日(金) キャラクターのイメージ
 ③8月26日(月) ストーリー展開
 ④8月27日(火)~9月30日
 ストーリー展開を考えていく

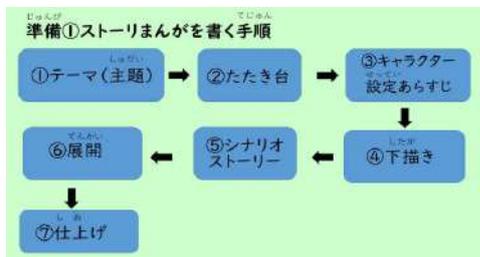
⑤ 発表練習
 ⑥10月12日(土)発表

②テーマ、キャラクター、舞台などを設定し、ストーリーを展開する。

(スケッチブックを使用しながら)

T(教師):「ここまでよくできました。」◎賞賛

T(教師):「次は、キャラクターを考えていきましょう。」



キャラクターを考える

- 人
- 宇宙人
- 動物・昆虫
- 乗り物など

T(教師):「どんな話がいい?」

◎ 教師との対話(やりとり)のなかで考える。考える時間の保障。参考になる教材を事前に用意する。

S(生徒):図鑑を指さして「宇宙」。

(図鑑)「取って。見てやりたいもん。」

T(教師):「イメージつけるか」「夢を叶える?」「助ける?」

S(生徒):「ちがうよ・・・。」

T(教師):「テーマは助けるにしたからさ、だれかを助けるか。」

S(生徒):「終わり~!!」

T(教師):スケッチブックを見せる。

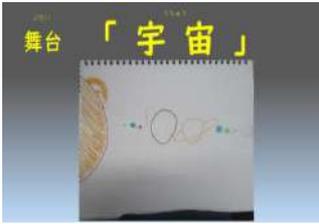
S(生徒):表情が和らぐ。うなづく。

※以下、T、Sのみで記す。

③文章、台詞は、生徒の発言を聴き取り、教師が記録する。

④ストーリーは、生徒と対話しながら作成する。6~8枚程度の絵コンテにまとめる。

【舞台、キャラクターの設定】



舞台 「宇宙」

キャラクターを考えてみよう

宇宙	みどりくん
どんな顔(やみ)にしますか? ・さみがりや、はずかしがりや ・やさしい	
どんな服(やみ)にしますか? ・友達(ともだち)をつくること ・ずる(ずる)な(やみ)にしますか? ・みどりビーム、Wビーム	
何の場所(やみ)にしますか? ・星(ほし)にいますか? ・星(ほし)にいますか?	

キャラクター



【ストーリー展開】



⑤ 操作性のある教具（ペープサート）を用意する。

⑥ 次に何が起こるのか、誰が何をするのか、この場面で何と言ったか、どう感じたかなどを発問し、生徒の想像を膨らませ、考えを引き出す。

◎前時の学習を振り返る際に、ワークシートを使用。生徒用として、ペープサートを用意。(Sに1本渡す)

T:「他のはないから作っていくか。」

S:ペープサートを操作しながら「こんにちは、こんにちは。」「ぼくのなまえはみどりくんです。」

T:「どんなキャラクターにするか考えていきましょう。」

T:「みどりくんはどこで生まれたことにする?」

S:「宇宙かな。」

T:「じゃあ、みどりくんは、おばけじゃなくて、宇宙人か。」

S:「うん。」

◎対話(やりとり)をしながら、ワークシートに記入していく。

S:「われわれは宇宙人だ。」

T:「われわれってさ、一人しかいないから、仲間いないからさ。仲間つくっていかないとね。」

S:「おーいさみしいよ。さみしいよ。」「みんなに会いたいよ。」

T:「友達がほしいのかい。」「みどりくんは、性格は、さみしがりやなんですかね。」「こわい?やさしい?」

S:「やさしい。」「ほらみて。」(おでこにペープサートをこする)

T:「かわいい、よしよし。」(Sの様子を見ながら)「わかったよ。」

◎共感的なかわり

T:「友達つくってやるか。」

S:「あかくん。」

T:「あかくんはどんな友達だ?」

◎(もう一つペープサートを提示)

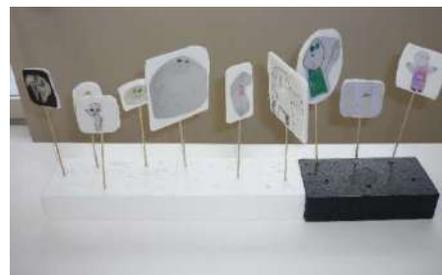
S:「いっすんぼうしちゃん。」

T:(すぐ、反応した様子を見て)「よく覚えてるな。」(賞賛)

◎ペープサートを向かい合い合わせながら

T:「ねえねえ、きみも、宇宙人?」

S:「みどりビーム。」



T:「よく出てくるね。」(次々とセリフが出てくる様子を賞賛)

S:「先生やられて。」

T:「わー。でもさ、仲良しでしょ。」「やられちゃったよ。みどりくん、たすけて。」

S:「よいしょ、よいしょ。」

◎Sと一緒にペープサートを操作しながら、ストーリーを引き出している。

T:「宇宙船も決まったし、どんな話にするか考えましょう。」

◎ペープサートを(Sの机の前)台座に差し込む。

T:「さいごはさ、助けてでしょう。」

◎ワークシートに記入したり、ペープサートを指さしたりしながら絵コンテを使って、キャラクターの整理をする。

T:「どうやって助け合う?」

S:「わかんない、もうつかれた」

T:「もう今日はここまででいいか、今日はいっぱい考えたもん。また次も仲間もふやしていくか。」

⑦ 「自分の気持ちを正しく認識する」「適切な表現方法で自分の感情を伝える」ための語彙や表現方法を獲得できるよう、身に付けさせたい語句や表現を選定する。

実在する漫画を例に

S:「なんで、〇〇は、殴るんだろうね、みんなのものを取るしね。」

T:「なんでだと思う」

S:「腹たってるんじゃない」

T:「先生がSのをとったらどうする、怒るでしょう」

◎他者の気持ちを考えるとき、役に入り込んで考えさせる。(役割:Tが他の登場人物、Sはみどりくん)

T:「なんで怒ってるの」

S:「宇宙船がせいまいから」

T:「みんなで協力して、大きな宇宙船作るからもうイライラしないで。もう落ちついた?」

S:「うん。」



(S:気持ちが落ち着かない様子)

S:「先生、がまんしろって言って。」「ちょっとストップって言って。」

◎小声でささやくように問いかける。

S:「何で、おれいらついてんの。」

T:「いらついてないでしょう。」「たぶんさ、近くに物があったからさわりたくなかったんじゃない。先生もそういうことがあるよ。」

9 研究の成果・課題

本研究では、アセスメントにより即時性と客観性のある実態把握を行う、国語科の題材指導を通して教科の目標と自立活動との関わりについて考える、研究の成果を今後の目標設定や学習課題の選定に活用することを目的とした。また、次の研究仮説をもとに検証を行った。

- 仮説1「発達検査によるアセスメント」「教師の観察と記録による情報共有」を行い、より根拠のある目標設定、学習内容や手立ての選択と次時の目標設定に生かすことができるのではないか。
- 仮説2「自分の気持ちを正しく認識する」「適切な表現方法で自分の感情を伝える」ための語彙や表現方法を獲得し、日常生活における肯定的な態度、および他の教科での学習効果の拡大につなげることができるのではないか。

(1) 仮説1について

生徒の実態を把握する方法、より根拠のある目標設定、学習内容や手立ての選択と次時の目標設定に生かすという点で、「発達検査によるアセスメント」「教師の観察と記録による情報共有」は有効であったと考える。

今回の研究対象となった生徒の場合、4月に本校に転入した生徒であったため、新担任から年度初めに前籍校からの情報、レスパイト入院時の様子をもとに情報提供をいただいた。これからどのような力を育てていくのか、何についてどのような点に配慮しながら教育活動を行っていくのか考える上でのベースとなった。また、これらは、個別の教育支援計画、個別の指導計画、年間指導計画へと反映されている。今回、本人の学習上の困難さを把握する方法の一つとして、「発達検査によるアセスメント」フォーマルアセスメントが行われた。テストバッテリーの中で、本人の認知及び特性、社会性などを多面的に理解することができたと考える。しかしこれは、あくまで参考材料であるため、「教師による観察と記録による情報共有」が必要であった。「教師による観察と記録による情報共有」は、研究対象となった国語科の授業だけでなく、他の授業でも日々行ってきた。

年間を通じて、このような日常場面の行動観察の記録や聴き取りも併せて行うことは、生徒の成長や興味関心のひろがり把握するとともに、授業改善（生徒の実態に合わせた目標設定、学習活動の工夫）につながったと考える。

(2) 仮説2について

個別の支援計画をみると、大きめのハンドタオルを持つと安心する、見通しを求める発言が多い、思い通りにならないと気持ちを崩すことがある、「終わり」を受け入れられず遊びや活動を続けようとするなど、難しい、体力的に疲れるかもしれない等の不安から活動への取り組みをしぼることがあるなど、「心理的な安定」を図ることを重点とすることがわかる。対象生徒の場合、隣接する医療機関への長期入院に伴う生活環境、学習環境の変化は大きい。また、主障がいによる学習上の困難さもある。そのようななかで、自分の思いをどのような形で伝え、対処していけば良いのか学習することは重要であろう。

今回、国語科の授業「絵本作り」を通して、テーマに沿って教師と一緒に登場人物の気持ちを想像したり、登場人物間の人間関係のなかで、適切な表現方法を考えたりすることは、新たな語彙や表現

方法を獲得することにつながったと考える。また、生活年齢に応じた関わりをしながらも、生徒の抱える思いに寄り添いながら、学習内容や進度を調整しながら進めてきた授業は、生徒の実態に即した活動であったと考える。

今回導き出した手立ては、他教科はもとより生活場面でも生かされている。その場の状況を受け入れるには難しい場面で、思わず言葉を発してしまった後に、「・・・先生に・・・しちゃった（・・・って言っちゃった）」「・・・したほうがいいよね」、「・・・しちゃうから、・・・してほしい」など、自分の行動を振り返るだけでなく、自分の行動を予測したり、調整したりしようとする姿が見られている。他教科においても、各授業者がそれぞれ授業記録をとり、互いに生徒の学習状況や支援を共有しているため、本人の特性に考慮した学習環境や学習内容を展開することにつながられた。学習内容や活動時間が負担と感じたときは、本人からの発信（発言や態度）があるため、一定の学習ルールのもと、活動を随時調整することもできた。また、生徒に対して共感的な関わりをすることで、生徒自らが自分の行動を振り返るきっかけをつくることにつながっている。

(3) 課題

本年度の学部研究を振り返った際に、子どもの「心の発達」についても見方を学ぶことでより深く生徒を理解することができるのではないかと意見をいただいた。今、生徒がどの段階の成長過程にあるのか、生活及び学習場面で見られる姿と比較、検討することで、一人ひとりの実態をさらに理解し、より適切な関わり方を吟味することができるのではないかと考える。

今後、発達心理学等の関連分野の知見も踏まえつつ、児童・生徒理解を進め、日々の実践を蓄積していきたい。

第4章

研究の考察とまとめ

1 研究の成果

2年間の研究の成果としては以下の通りである。

- (1) 児童生徒の理解を深めていきたい事項に基づいたアセスメント方法を検証することで教師一人ひとりの子どもたちの見方、とらえ方の視点が広がり、適切な方法で実施することができた。
- (2) アセスメントに基づいた授業改善・評価についての全体研修を行い、アセスメントの方法について理解を深めることで、個別の指導計画及び、教科指導の充実につなげることができた。
- (3) 指導仮説に基づいた授業実践を共有することで、指導上の手立てや配慮に一貫性が生まれるとともに、成果や成長がわかりやすくなった。
- (4) グループ毎の実践研究の計画、実践、まとめを全体交流することで校内全体の生徒理解を深め、病弱教育に関する専門性や、教育力の向上につなげることができた。

2 仮説の検証

第1章 3 (3)研究の仮説

実践研究の場の一層の充実により、複数の教師の目による客観性を担保した教育活動が展開できるのではないかと。

フォーマル又はインフォーマルなアセスメントを実施、分析、検証することで教師一人ひとりの子どもたちの見方、とらえ方の視点が広がり、個別の指導計画及び教科指導の充実につながっていくのではないかと。

「第3章 7 成果と課題（研究の評価と改善に向けて）」の中で、仮説に関わる成果や課題を載せているため、ここでは結論のみ述べていく。

【結論】

研究実践グループ内で検証された指導仮説に基づく授業実践により教科指導上の手立てや配慮の整理・充実とともに、実践研究の場の一層の充実が図られる。また、複数の目による客観性を担保した教育活動において、指導上の手立てや配慮に一貫性が生まれるとともに、成果や成長がわかりやすくなる。

グループ毎に学習状況の実態や課題を洗い出し、適切なアセスメントの実施、分析、検証をすることで、教師一人ひとりの子どもたちの見方、とらえ方の視点が広がり、個別の指導計画及び教科指導の充実が図られる。

「第3章 7 成果と課題（研究の評価と改善に向けて）」にも複数の意見があったように、グループごとでアセスメントを生かした授業実践に取り組み、子どもへの配慮や学習目標の手立てを講じ、授業内容を整理し仮説検証することができたと考える。子どもたちの教科指導における資質・能力の育成につながるアセスメントのプロセスや考え方を次年度以降も継続していく必要がある。また、教育的アセスメントの意義を個別の指導計画や自立活動実態把握票へ反映するなど検証・発展できる体制づくりをする必要がある。

今後も授業改善、評価に関する研修の機会を設定し、より一層の教科指導の充実に向け、取り組みを行っていく。

3 今後の課題と展望

病弱虚弱教育特別支援学校として本分校の現在の教育課題解決に向けて、今後もさらなる取り組みが必要であることをまとめた。

第4章 研究の考察とまとめ

- ・教科指導の充実
- ・カリキュラム・マネジメントのより一層の実現
- ・目標と評価の設定を明確にした単元計画の作成
- ・「主体的・対話的で深い学びの充実」に向けた具体的指導実践
- ・教科等横断的・学部縦断的な視点での授業づくり、単元計画一覧、教科関連図
- ・病気療養児童生徒の理解と教育
- ・重度心身障がい児の教育、卒業後の継続療養に向けた指導
- ・神経筋疾患児童生徒の進行性疾患に対する教育、卒業後に向けた進路・生活指導
- ・病院及び卒業後の生活理解
- ・客観的実態把握ツールの模索・客観的評価方法の模索
- ・本分校の教育実践の維持・継承
- ・ICTを活用した指導実践

本分校は、病弱教育のセンター的機能を有し、より一層の児童生徒への指導の充実に向け教員一人ひとりが日々考え、業務・指導を行っている。また、訪問教育を受けている児童生徒の適切な指導内容と体制づくりを図っていく上で必要なことを踏まえて、上記で述べた課題等から取り組んでいくべき課題は何かを見極める必要がある。

これらの点も踏まえつつ、①病弱及び特別支援の専門性の向上を目指すもの、②教育界及び学校全体の直近の課題を解決するもの、③職員全体で取り組むもの、④児童生徒の指導につながるものを念頭に置き、今後も密な研究の場となるよう、次年度の取り組みにつなげていく。

あとがき

本分校は、札幌に移転して、本年、早4年目を迎えました。旧八雲養護学校の時代から積み上げてきたこれまでの教育実践の蓄積を基に創意工夫を凝らした教育を推進してまいりました。

本研究は、昨年度より「子どもたちの教科指導における資質・能力の育成につながるアセスメントの探究」として1年次をアセスメント情報の収集・分析による教科指導の手立てや配慮の整理、そして2年目である本年はアセスメントに基づいた授業改善、評価に取り組んでまいりました。アセスメントに基づいた授業改善と評価は、教育の質を向上させるための重要な実践と捉え、アセスメントの結果を基に、生徒に具体的で明確なアプローチやフィードバックを提供することにより、生徒は自分の強みと改善点を理解し、次の学習に活かすことができます。

文部科学省の学習指導要領では、子どもたちが「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」の三つの柱をバランスよく育成することが求められています。このような育成の実現に向け、教職員全体で研鑽に励み研究を推進したことで、改めて子どもたちの現在の状況を多面的、立体的に把握することの大切さを確認するとともに、子どもたち一人ひとりの将来につながる資質・能力の育成を図ることができたと考えています。

本研究としてまとめた内容を、今後の日常の実践をとおして更に検証・発展させていきたいと考えています。これからも本分校では、「子どもたちの教科指導における資質・能力の育成につながるアセスメントの探究」を欠かさず、病弱教育における中心校として新たな展開を図っていきけることを切に願っております。

これからも皆様のお力をお借りして、道内の病弱教育の特別支援学校として研究及び研修の充実に努めてまいります。今後とも、本分校の研究に対しまして忌憚のないご意見、ご指導をお聞かせいただければ嬉しい限りであります。

どうぞよろしく願いいたします。

令和7年3月 教頭 増田 望

研究同人

校 長 星野 健史

教 頭 増田 望

小学部 愛澤 文祥 鎌田 仁子 嘉屋 史眞子
北林 靖市郎 小柳 博靖 中條 由紀子
中村 比奈子 藤田 結香

中学部 大山 千鶴子 喜多 祐美 佐藤 泰雅
鶴田 高之 林 美紗子 宮村 房
武藤 素子 矢内 麻衣子

高等部 相沢 享子 梅野 綾人 川村 史子
工藤 翔太 櫻庭 大吾 佐橋 亜起英
三条 真知子 田中 貴志 中隲 晃
橋本 尚幸 森野 美穂 森屋 伸
柳澤 啓

養護教諭 浅川 繭子

研究部 森野 美穂 橋本 尚幸 大山 千鶴子
佐藤 泰雅 中條 由紀子 中村 比奈子

令和6年度 研究紀要

令和7（2025）年3月発行

発行者：北海道手稲養護学校三角山分校

校長 星野 健史

〒063-0005

札幌市西区山の手5条8丁目1番38号

北海道手稲養護学校三角山分校

Tel 011-633-3020 FAX 011-633-3023